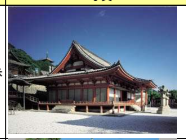
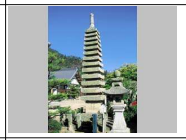
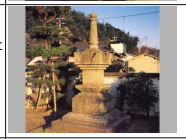
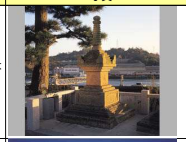
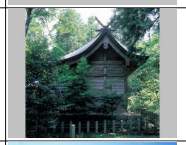
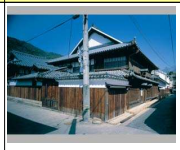
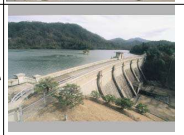
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（建造物）	厳島神社 朝座屋　1棟 能舞台（附橋掛及び能楽屋）　1棟 揚水橋　1棟 長橋　1棟 反橋　1棟	いつくしまじんじゃ	5棟	廿日市市宮島町	明32.4.5	朝座屋／桁行八間，梁間四間，一重，右側面切妻造，左側面入母屋造，檜皮葺 能舞台／桁行一間，梁間一間，一重，切妻造，妻正面，檜皮葺 揚水橋／長さ三間，幅二間 長橋／長さ十八間，幅一間四尺 反橋／擬宝珠高欄付，長さ十一間三尺，幅二間二尺		【朝座屋】もともと勤番神職が祭典時の参集及び雑掌の所で，明治から昭和30年代までは社務所になっていた。平安時代（794～1191）の建築様式を伝えているが，現在の建物は，江戸時代前期（1615～1660頃）の建築である。 【能舞台】創建は永禄11年（1568）ごろ，毛利元就が京都の観世（かんぜ）太夫を招いて法楽（ほうらく）した時と伝えられる。現在の建物は，延宝8年（1680）の建築であるが，屋根の正面妻，笛座，地謡座，後座，橋掛などに江戸幕府の式楽が制定した形式とは異なる古式を伝えている。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（建造物）	厳島神社摂社天神社本殿 附　宮殿　1基 渡廊　1棟 棟札　1枚	いつくしまじんじゃせっしゃてんじんしゃほんでん	1棟	廿日市市宮島町	明32.4.5	本殿／桁行三間，梁間三間，一重，入母屋造，妻入，背面庇付，檜皮葺 宮殿／一間社流見世棚造，檜皮葺 渡廊／桁行四間，梁間一間，一重，切妻造，檜皮葺		別名連歌堂と言い，明治の頃までここで連歌（れんが）の会が催されていた。弘治2年（1556）毛利隆元によって建てられた。丹塗（にぬり）の建物群の中で素木（しらき）造の繊細な木割をもつ住宅風建築で，また，この建物だけが板壁でなく漆喰壁であることからも，この時代の住宅風工法の影響を受けたと思われる。室町時代（1333～1572）に盛行した連歌会所（かいしょ）の遺構としても珍しい。 ※連歌（れんが）　短歌の上句（5・7・5）と下句（7・7）を交互に読み連ねる文芸の一種。鎌倉時代（1192～1332）以後発展し，室町時代から戦国時代（14～16世紀）に最盛期を迎えた。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（建造物）	厳島神社大鳥居 附　棟札　2枚	いつくしまじんじゃおおとりい	1基	廿日市市宮島町	明32.4.5	木造両部鳥居，檜皮葺，丹塗，高さ16.8m		本社から108m離れた海中に立つ，本社に計4本の控え柱を持つ「両部大鳥居」の形式である。現在の大鳥居は明治8年（1875）建立。本柱は1本のクスノキを使用している。木造の鳥居としては高さ・大きさともに日本一である。 創建についてはつまびらかでないが，最古の記録がある平清盛の仁安3年（1168）の造営のものを初代とすると，現在のものは8代目となる。厳島神社を描いた「一遍聖人聖絵」には社殿前に明神（みょうじん）鳥居が描かれている。現在の形式になったのは天文16年（1547）大内義隆等が中心になって行った再建時と言われる。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（建造物）	厳島神社摂社大国神社本殿	いつくしまじんじゃせっしゃおおくにじんじゃほんでん	1棟	廿日市市宮島町	明32.4.5	桁行三間，梁間四間，一重，切妻造，妻入，檜皮葺		戦国時代，元亀2年（1571）建立と伝えられる。西廻廊にほぼ接して建てられ，優美な曲線の屋根を持つ社殿群の中で，ほとんど直線に近い屋根のそりを持つ建物である。拝所は廻廊と長橋をつなぐ廊下の役も果たし，かつては本社裏の御供所から運ばれてきた神饌（しんせん，おそなえ）を，一度この御殿に納めたという。 大国主命を祭神とするこの社の起源についてはよくわからないが，天文6年（1537）には既にこの神が祀られていた。大国神社と称されたのは明治以後と思われ，それ以前は「大黒堂」と言われていた。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（建造物）	厳島神社五重塔	いつくしまじんじゃごじゅうのとう	1基	廿日市市宮島町	明33.4.7	三間五重塔婆，檜皮葺，高さ27m		和様と禅宗様が融合されて，みごとな構成をなす五重塔である。室町時代の応永14年（1407）創建と言われ，露盤（ろばん）下品軒覆の鉄板鋳銘から戦国時代の天文2年（1533）に改修されたことがわかる。九輪を鋳造した廿日市鋳物師（いもじ）山田壱岐守の名もあげられている。 初重の柱は上部を金襴巻（きんらんまき）とした朱漆塗で，それぞれ彩色の寄附者の名が記されている。内陣の天井は雲竜，来迎壁は表に蓮池，裏に白衣観音，周囲の壁板は瀟湘（しょうそう）八景を添景とした真言八祖の壁画である。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（建造物）	厳島神社多宝塔 附　棟札　1枚	いつくしまじんじゃたほうとう	1基	廿日市市宮島町	明34.8.2	三間多宝塔，こけら葺，高さ15.6m		この塔はほぼ純和様を基調としており，戦国時代の大永3年（1523）創建と伝えられる。重層で屋根は上下とも方形であるが，下層方形の屋根の上にまんじゅう形の亀腹（かめばら）があり，それにつれて上層は柱が円形で配列されている。軸部まわりの組物まで円形で，それから上の大仏様の組物手先は放射状に配され，軒桁で方形に取り合わせている。 多宝塔はインドにおける仏の墳墓であるスツーパ（卒塔婆）から発した塔の一形式で，この塔を特色づける亀腹は墳丘の名残りである。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（建造物）	厳島神社末社荒胡子神社本殿 附 棟札　1枚	いつくしまじんじゃまっしゃあらえびすじんじゃほんでん	1棟	廿日市市宮島町	明37.2.18	一間社流造，檜皮葺		美しい小建築である。棟札には室町時代の嘉吉元年（1441）に島田三郎左衛門尉宗氏が造立した旨が記されている。 室町時代（15世紀前半）造立の例として和様と禅宗様が混交しており，その中でも破風の曲線，扉口上の蟇股（かえるまた）の股内彫刻絵様が左右対照をわずかに中心でくずしたところ，向拝（こうはい）の丸柱と遊離した手挟（たばさみ）の工法等にこの建物を特色づける手法が見られる。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（建造物）	厳島神社末社豊国神社本殿（千畳閣） 附　棟札　2枚	いつくしまじんじゃまっしゃとよくにじんじゃほんでん（せんじょうかく）	1棟	廿日市市宮島町	明43.8.29	桁行正面十三間，背面十五間，梁間八間，一重，入母屋造，本瓦葺		豊臣秀吉が毎月一度千部経の転読供養をするため，天正15年（1587）発願，安国寺恵瓊（あんこくじえけい）を造営奉行として同17年（1589）ほぼ完成した大経堂である。文禄・慶長の出兵，秀吉の死去などの理由により天井板もはられず，正面の階段もない未完成状態であるが，規模広壮，木割雄大で軒丸瓦・唐草瓦に金箔をおすなど，よく桃山時代（16世紀末）の気風を示している。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（建造物）	浄土寺阿弥陀堂	じょうどじあみだどう	1棟	尾道市東久保町	大2.4.14	桁行五間，梁間四間，一重，寄棟造，本瓦葺		浄土寺本堂（国宝）の東隣に立つこの建物は，南北朝時代，康永4年（貞和元，1345）再建と伝えられる。本堂，多塔宝（国宝）が再建された後に建てられたものと思われる。優れた和様建築と評価されている。本尊は阿弥陀如来坐像（県重文）である。 浄土寺は尾道有数の古刹（こさつ）で，尾道水道東口付近に位置する。鎌倉時代（1192～1332）以後，西大寺流律宗寺院として特に信仰を集めた。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）

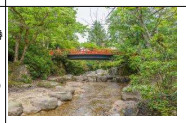
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(建造物)	西国寺金堂 附　厨子　1基	さいこくじこんどう	1棟	尾道市西久保町	大2.4.14	桁行五間，梁間五間，一重，入母屋造，向拝一間，本瓦葺		西國寺は行基菩薩の開基と伝えられる真言宗の古刹(こさつ)である。 金堂は，至徳3年(1386)建立で，和様を基調とした建物である。側柱上が二手先で蛇腹支輪及び小天井付にし，向拝(こうはい)は三ツ斗組である。それに虹梁(こうりょう)が掛けられ中供(なかそなえ)に蟇股(かえるまた)があり，虹梁の柱外には挙鼻(こぶしば)が，また主屋の方へは手挟(たばさみ)が出て威厳が示されている。入母造(いりもやづくり)の妻飾(つまかざり)は二重虹梁大瓶束(にじゅうこうりょうたいへいづか)で，屋根に重量感があり，規模壮大で手法雄健な堂々とした感じを与える。内部の厨子(ずし)，須弥壇(しゅみだん)も秀麗である。木造薬師如来坐像(重文)が本尊である。		
国	重要文化財(建造物)	西国寺三重塔	さいこくじさんじゅうのとう	1基	尾道市西久保町	大2.4.14	三間三重塔婆，本瓦葺		この三重塔は，永享元年(1429)足利義教によって建立された。室町時代(1333～1572)によく行われた復古建築の純和様で，和様と禅宗様の混交の風に飽き足らず，奈良時代(710～793)への復帰をめざしたものである。どっしりとした美しい塔で，回縁がなく，石製基壇の上に立つ珍しい遺例である。		
国	重要文化財(建造物)	光明坊十三重塔	こうみょうぼうじゅうさんじゅうとう	1基	尾道市瀬戸田町御寺	昭2.4.25	石造，花こう岩製		この塔は，鎌倉時代，永仁2年(1294)建立であり，基壇に銘がある。西大寺流律宗の僧侶である忍性(にんしょう)が建てたと伝えられ，基壇には作者の心阿の名もみえる。軒は厚く，力強い反りを示し，初層四面の仏の種字(しゅじ)は薬研(やげん)彫りで，雄健な鎌倉時代(1192～1332)の代表的な作品である。 光明坊は，生口島南岸のほぼ中央にある，真言宗の古刹(こさつ)である。		
国	重要文化財(建造物)	安国寺釈迦堂 附　柱聯　1双	あんこくじしゃかどう	1棟	福山市鞆町後地	昭2.4.25	桁行三間，梁間三間，一重，入母屋造，本瓦葺		旧金宝寺仏殿と伝えられる建物。金宝寺は暦応2年(1339)足利尊氏によって備後安国寺とされた。慶長4年(1599)安国寺恵瓊(えけい)が大修理を加えた。鎌倉時代末期から南北朝時代初期(14世紀前半)の，質実な禅宗様仏殿の形式をよく残している。		
国	重要文化財(建造物)	福山城 伏見櫓　1棟 筋鉄御門　1棟	ふくやまじょう ふしみやぐら すじがねごもん	2棟	福山市丸の内	昭8.1.23	伏見櫓／三重三階，隅櫓，本瓦葺 筋鉄御門／脇戸付櫓門，入母屋造，本瓦葺		福山城は元和8年(1622)水野勝成(みずのかつなり)の命によって築かれた近世城郭である。伏見櫓や筋金御門など築城当時の建物が残されている。 【伏見櫓】将軍徳川秀忠の命によって伏見城から移された櫓。もと伏見城「松の丸東やぐら」であった。本瓦葺・白壁の三重三階櫓で，横長・惣2階の上に正方形の望楼を乗せたような外観である。慶長年間の貴重な城郭建築遺構である。 【筋鉄御門】伏見城からの移築と伝えられるが，築城時の新造とも考えられている。柱のかどに筋鉄を施し，とびらに十数条の筋鉄を打ちつけてあるためその名が生まれた。		関連施設：福山城博物館 (084-922-2117)
国	重要文化財(建造物)	厳島神社摂社大元神社本殿 附　宮殿　3基 銘札　2枚	いつくしまじんじゃせっしゃおおもとじんじゃほんでん	1棟	廿日市市宮島町	昭24.2.18	本殿／三間社流造，板葺 宮殿／各，一間社流見世棚造，柿葺		戦国時代，大永3年(1523)造営。屋根が異例の長板葺で，中世の絵巻物には見られるが，他に類例を見ない日本唯一の「六枚重三段葺」の建物である。本殿内陣にある玉殿(ぎょくでん)には嘉吉3年(1443)の墨書があり，現在の社殿より古い。また，社殿の彫刻の一部も現在の社殿以前の建物からの再利用と考えられている。 大元神社は本社の厳島神社より古い鎮座と伝えられている。		関連施設：厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(建造物)	厳島神社宝蔵 附　棟札　1枚	いつくしまじんじゃほうぞう	1棟	廿日市市宮島町	昭24.2.18	桁行二間，梁間一間，校倉，寄棟造，檜皮葺		室町時代初期(14世紀ごろ)の造営と思われ，天正16年(1588)に毛利輝元が，慶長15年(1610)に福島正則が修理している。昭和9年(1934)に現在の宝物館(登録有形文化財)ができるまで，国宝平家納経をはじめとする神社の宝物が収蔵されていた。五角形の断面をした木材を組み合わせた校倉(あぜくら)としては最古の建物である。 県内にはこの校倉の外に，室町時代(1333～1572)造立と伝えられる熊野神社宝蔵(三次市)，江戸時代初期(17世紀)の造立である多家神社宝蔵(府中町)の3棟がある。		関連施設：厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(建造物)	佛通寺含暉院地蔵堂 附　須弥壇　1基	ぶっつうじがんきいんじぞうどう	1棟	三原市高坂町許山	昭24.2.18	桁行三間，梁間三間，一重，宝形造，本瓦葺		佛通寺は応永4年(1397)に小早川春平が愚中周及(ぐちゅうしゅうきゅう)を迎えて開いた臨済宗の大寺である。その後，火災が相次ぎ，創建当時の建物は今では禅師の塔所含暉院だけとなった。 地蔵堂は応永13年(1406)の建築で，内部に純禅宗様のすこぶる優秀な須弥壇(しゅみだん)を持つ，小規模な禅宗様の仏殿である。現在は内部に木造床が張り巡らされているが，もとは磚敷床(せんじきゆか)で，柱間にもかなりの変更がなされているようである。		
国	重要文化財(建造物)	天寧寺塔婆 附　銘札　1枚	てんねいじとうば	1基	尾道市東土堂町	昭24.2.18	三間三重塔婆(元五重)，本瓦葺		天寧寺は貞治6年(1367)に足利義詮が建て，普明国師を開山とした曹洞宗の大寺である。のち本堂などは雷火で焼失し，この塔だけが残った。 塔婆は嘉慶2年(1388)の造立で，元禄5年(1692)上の二重を撤去し三重塔婆に改修された。現存する部分は相輪まで当初のものをよく伝えており，和様を基調に禅宗様が濃厚にとり入れられ，規模雄大で手法もまたすぐれている。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（建造物）	不動院鐘楼	ふどういんしょうろう	1棟	広島市東区牛田新町三丁目	昭27.7.19	桁行三間，梁間二間，白壁塗の袴腰付鐘楼，入母屋造，柿葺		室町時代，永享5年（1433）建立。解体修理の結果，安国寺恵瓊（えけい）が住持であった天正16年（1588）頃に，修理・移築されたと推定されている。白壁塗の袴腰（はかまこし）付鐘楼で，外観は各部の釣合がよく整っている。細部は和様三手先（みてさき）の組物（くみもの）を用いているが，軒は二軒扇柱（にけんおうぎばしら）で，隅木（すみき）も禅宗様の手法をとっているのは珍しい意匠である。二階の頭貫鼻等には文禄頃（1592～1596）とみてよい手法が混じている。後補の痕は少ない。内部に銅製梵鐘（重文）を納める。 不動院は，中世，安芸安国寺として安芸の守護大名・武田氏の信仰を得ていた。火災などで一時は堂塔の大半が失われたが，安国寺恵瓊が再建に尽力し，現存する建物の多くが恵瓊によって建てられたといわれる。江戸時代初め（17世紀初頭）に禅宗から真言宗に変わり，寺号も宥珍（ゆうちん）が不動明王を奉じてきたので不動院と呼ばれるようになった。		
国	重要文化財（建造物）	浄土寺納経塔	じょうどじのうきょうとう	1基	尾道市東久保町	昭28.8.29	石造，宝塔基壇付	高さ2.7m	弘安元年（1278）10月，尾道の富商・光阿弥陀仏のために，子息の光阿吉近（こうあよしちか）が建てた供養塔。光阿弥陀仏は，浄土寺が定証（じょうしょう）によって再興される以前に，現在の浄土寺阿弥陀堂などの修造に尽力した人物である。 塔身に胎蔵界四仏の種字をきざみ，法華経・浄土三部経・梵網経（ぼんもうきょう）などを奉納したものである。基礎に格狭間（こうざま）をつけ，塔身の上に高欄を設けるなど整備した形を示すが，笠の上に露盤をおき請花・宝珠にしてあることは古調で，大きい基壇とあいまって重厚豪快な感じがする。鎌倉時代（1192～1332）の石造宝塔の中では年代が古く，形態もよく整った優品である。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
国	重要文化財（建造物）	浄土寺宝篋印塔	じょうどじほうきょういんとう	1基	尾道市東久保町	昭28.8.29	石造	高さ3.2m	沙弥行円など四名の逆修（ぎゃくしゅ）や光孝らの追善のため，南北朝時代の貞和4年（1348）10月1日に建立された。 みごとな格狭間（こうざま）つきの基礎の上を美しい反花（かえりばな）とし，金剛界四仏の種字をきざんだ塔身を安置し，突起には八方天を種字で現している。格狭間には造立の趣旨が刻まれている。 基礎と塔身の間に受台を入れていることは，伊予や備後南部の宝篋印塔に見られる地方的特色である。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
国	重要文化財（建造物）	宗光寺山門	そうこうじさんもん	1棟	三原市本町	昭28.11.14	四足門，切妻造，本瓦葺		小早川隆景の居城である新高山城（豊田郡本郷町）内の門を移建したと伝えている。規模の大きい木割の太い四脚門で，蟇股（かえるまた）などの細部に桃山時代（16世紀末）を思わせる豪快な手法が見られる。 宗光寺はもとは匡真寺と言い，毛利元就が新高山城内に建立したが，後に隆景が三原城へ移った際に隆景によって三原へ移され宗光寺と称するようになったという。		
国	重要文化財（建造物）	浄土寺山門 附　棟札　1枚	じょうどじさんもん	1棟	尾道市東久保町	昭28.8.11（県指定） 昭28.11.14 平6.7.12（露滴庵（附中門）分割）	四脚門，切妻造，本瓦葺，両袖潜付		浄土寺の表門で，南北朝時代（1333～1392）に再建されたすぐれた建築である。本堂と同じ工匠の手になったのか，本堂向拝の軒の規矩と同じ規矩をもつことは，あまり時代の差がないことを示すと思われる。側面の妻の部分の板蟇股（かえるまた）に足利氏の家紋である「二引両」が表されている。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
国	重要文化財（建造物）	沼名前神社能舞台	ぬなくまじんじゃのうぶたい	1棟	福山市鞆町後地	昭28.10.20（県指定） 昭28.11.14	桁行一間，梁間一間，一重，切妻造，妻入，柿葺，屋根はパネル式		もと伏見城にあった組立式能舞台を水野勝成が福山へ移したと伝えられる。万治年間（1658～1661），水野氏が神社に寄進し，元文3年（1738）現在のような固定式とされた。仕口はすべて柄差し・込栓打，屋根はパネル式であり，各部材に番号・符号が残るなど，随所に組立式であった当時の様式がみられる。桃山時代から江戸時代初頭（16世紀末～17世紀前半）の他に類例のないものである。		
国	重要文化財（建造物）	米山寺宝篋印塔	べいさんじほうきょういんとう	1基	三原市沼田東町納所	昭31.6.28	高さ2.5m		沼田小早川氏の墓所の北東隅にあり，墓地内ではひときわ大きい石塔である。鎌倉時代・元応元年（1319）「大工念心」によって造られた。温雅の感があり美しい意匠であり，鎌倉時代末期（14世紀前半）の宝篋印塔の秀作である。塔身に「大工念心　元応元年己未十一月日　一結衆敬白」の刻銘がある。 米山寺は沼田庄地頭小早川茂平が嘉禎元年（1235）に建てた氏寺で，小早川氏歴代の墓（石造宝篋印塔20基）が立ち並ぶ。		
国	重要文化財（建造物）	磐台寺観音堂 附　棟札　3枚	ばんだいじかんのんどう	1棟	福山市沼隈町能登原	昭30.9.28（県指定） 昭31.6.28	桁行三間，梁間二間，背面一間，通庇，一重，寄棟造，庇葺おろし，本瓦葺		安土桃山時代の元亀元年（1570）に毛利輝元によって建てられたと伝えられる。阿伏兎（あぶと）岬の高さ10m余の岩頭に建ち，自然と調和して見事な景色をつくりあげている。 禅宗伽藍には珍しい和様で，外部は丹塗（にぬり）で，内部格天井には極彩色で藤井松林が百花図を描いている。当初の平面は正四角形であるが，寛文年間（1661～1673）に堂後方の奥行一間を付け足したという。 ※藤井松林（ふじいしょうりん）…江戸時代後期の画家		
国	重要文化財（建造物）	不動院楼門	ふどういんろうもん	1棟	広島市東区牛田新町	昭29.9.29（県指定） 昭33.5.14	三間一戸二階二重門，入母屋造，本瓦葺		室町時代末期から安土桃山時代（16世紀後半）の頃に建立された門。 禅寺の山門に一般的だった禅宗様の二重門で，上層には十六羅漢像が安置されている。この時代の建物としては，ほとんど和様を交じえていないのはかえって珍しい。上層の勾欄（こうらん）は親柱だけ禅宗様の逆蓮柱とし，他は和様である。 寺伝によると安国寺恵瓊（えけい）が朝鮮半島から持ち帰った材木で建てたと言い，上層の尾垂木（おだるき）に「朝鮮木文禄三」の刻銘や斗供（ときょう），綾長押などの「朝鮮」の墨書から，一部の材料に朝鮮半島の木を使い，文禄3年（1594）頃に建立したと思われる。ただし，細部にそれより少し溯った室町時代末期の様式手法が見られるので，文禄のは修理かとも思われる。 不動院は，中世，安芸安国寺として安芸の守護大名・武田氏の信仰を得ていた。火災などで一時は堂塔の大半が失われたが，安国寺恵瓊が再建に尽力し，現存する建物の多くが恵瓊によって建てられたといわれる。江戸時代（1603～1867）に禅宗から真言宗に変わり，寺号も宥珍（ゆうちん）が不動明王を奉じてきたので不動院と呼ばれるようになった。		

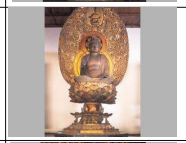
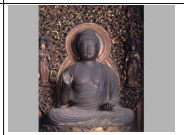
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（建造物）	浄土寺宝篋印塔	じょうどじほうきょういんとう	1基	尾道市東久保町	昭36.3.23	石造	高さ1.9m	浄土寺境内の南側にあり，「足利尊氏の墓」と称されている。 非常に洗練された姿の塔で，各部分の彫成つりあいがよくとれた引き締まった堅実な姿である。最下層の反花座（かえりはなざ）にある複合の蓮弁及び基礎側面の格狭間（こうざま）は大きくみごとである。塔身には金剛界四仏を種子（しゅじ）で配し，笠の隅飾はやや外にかたむき，二弧の内側に八方天の種字をあらわしている。 相輪を完備した，南北朝時代（1333～1392）における中国地方の宝篋印塔の代表作である。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
国	重要文化財（建造物）	西郷寺本堂	さいごうじほんどう	1棟	尾道市東久保町	昭36.6.7	桁行七間，梁間八間，寄棟造，本瓦葺		南北朝時代の文和2年（1353）に二代目住持の託阿（たくあ）が発願して造られた建造物である。角柱上に舟肘木を置くだけの簡素な形式であるが，方三間の内陣の周囲を外陣がめぐる形式の平面は浄土教に特徴的で，時宗本堂最古の遺構として貴重である。 西郷寺は時宗に属し，正慶年間（1332～1334）に遊行六代の一鎮によって創始されたと言われる。当時は「西江寺」と称し，それを示す石柱と寺号扁額を境内及び本堂内に伝えている。 ※時宗…鎌倉時代（1192～1332），一遍上人（1239～1289）が開いた浄土教の一派。踊念仏で知られる。		
国	重要文化財（建造物）	西郷寺山門	さいごうじさんもん	1棟	尾道市東久保町	昭36.6.7	棟門，本瓦葺		室町時代の貞治年間（1362～68）の建築で，板蟇股（かえるまた）や破風などに室町時代の様式がみられる。 西郷寺は時宗に属し，正慶年間（1332～1334）に遊行六代の一鎮によって創始されたと言われる。当時は「西江寺」と称し，それを示す石柱と寺号扁額を境内及び本堂内に伝えている。 ※時宗…鎌倉時代（1192～1332），一遍上人（1239～1289）が開いた浄土教の一派。踊念仏で知られる。		
国	重要文化財（建造物）	竜山八幡神社本殿 附　棟札　3枚	たつやまはちまんじんじゃほんでん	1棟	山県郡北広島町新庄字共免	昭32.2.5（県指定） 昭37.6.21	三間社流造，銅板葺		戦国時代の永禄元年（1558）造営。内陣の柱に「此宮永禄元年戊午歳建申候，珎融」という墨書銘がある。 近畿地方の有名な工匠を招いて建てられたものと思われ，彫刻を主として木割は誠にみごとである。また，本殿の正面向って左の間の蟇股（かえるまた）は，時代特徴をよくあらわし，その変遷を知るうえでの好資料である。 竜山八幡神社は鎌倉時代末期（14世紀前半）に吉川氏が大朝庄地頭として入封した時，本貫地の駿河国入江庄吉川邑（静岡県）から勧請と言われる。		
国	重要文化財（建造物）	円通寺本堂 附　厨子　1基	えんつうじほんどう	1棟	庄原市本郷町甲	昭33.3.13（県指定） 昭37.6.21	本堂／桁行三間，梁間三間，一重，入母屋造，銅板葺 厨子／一間厨子		戦国時代の天文年間（1532～55）に山内直通が再建したと伝えられる。三間三面脇仏壇付の禅宗様仏殿として一応の形を整えている。扉は框（かまち）の中央に稜線があるもので古式である。厨子もまた整然とした禅宗様の優秀なもので，おそらく当初からのものであろう。 円通寺は，地毘庄（じびのしょう）地頭として鎌倉時代末期（14世紀前半）に入部した山内首藤（やまのうちすどう）氏が本拠の甲山城中腹に建てた菩提寺である。		
国	重要文化財（建造物）	吉備津神社本殿	きびつじんじゃほんでん	1棟	福山市新市町宮内字上市	昭40.5.29	桁行七間，梁間四間，入母屋造，向拝付，檜皮葺		江戸時代初期の慶安元年（1648）福山藩主水野勝成によって建てられたと伝えられる。比較的大きいことと備後・安芸地方によくある「余間造り」の平面を持つことを地方的特色としている。正面に千鳥破風・軒唐破風を持った堂々とした江戸時代初期の建築でありながら，室町の風格と桃山彫刻を具備した優秀な蟇股（かえるまた）を備えている。勾欄（こうらん）の擬宝珠（ぎぼし）の刻銘及び文書により慶安元年建立が分かるなど，時代考証の尺度としても価値がある。		関連施設：備後一宮吉備津神社宝物館（0847-51-3395）
国	重要文化財（建造物）	旧木原家住宅 附　鬼瓦　1個	きゅうきはらけじゅうたく	1棟	東広島市高屋町白市	昭34.7.15（県指定） 昭41.6.11	桁行12.6m，梁間15.5m，切妻造，一部二階，本瓦葺		江戸時代初期の町屋建築。寛文5年（1665）建築と推定される。表通りに沿って横長に建てられ，正面右側に入口と土間，左側に店と座敷，裏に居住空間が設けられ，土間が表と裏をつないでいる。入口には大戸（おおと）が付けられ，店の表側には格子戸（こうしど）が入れられている。町屋形式の古い形態を保存する数少ない例である。 木原家は西条盆地の東方の白市に居住し，江戸時代（1603～1867）は醸造業や両替商を主とする豪商であった。		
国	重要文化財（建造物）	堀江家住宅	ほりえけじゅうたく	1棟	庄原市高野町中門田字城山下	昭41.12.5	桁行19.8m，梁間10.5m，一重，入母屋造，茅葺，		創建時期は明らかでないが，17世紀後半から18世紀前半とも伝えられる。古い農家の間取であった三間取りの痕跡がたどれる貴重な遺構であり，古い農家の形態をよく保存した数少ない例である。後年，座敷と納戸のあたり，それに引き続いて中の間が再度付加されてきていることなど変遷の跡が見えるとともに，素朴さと力強さがある。また釘を使っていないことなど民俗文化財としても貴重な資料となっている。		
国	重要文化財（建造物）	荒木家住宅	あらきけじゅうたく	1棟	庄原市比和町森脇	昭43.4.25	桁行20.6m，梁間10.9m，入母屋造，茅葺		構造及び細部の手法から江戸時代中期，17世紀末から18世紀初めの建築と考えられる。比婆郡高野町の堀江家住宅（重要文化財）と梁の組み方は似ているが部材の形はやや新しい。平面は全体の半分を占める土間及び「だや」と床上五室からなっていて，その中の「たかま」は，床を一段高くして神を祀った部屋であり，神官の家としての特性を示している。 荒木家は中世末（16世紀）からこの地へ住み，神官であった。		

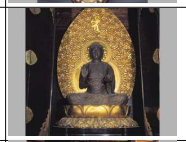
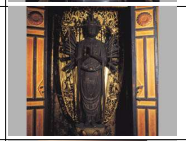
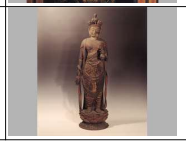
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（建造物）	林家住宅 主屋　1棟 表門　1棟	はやしけじゅうたく	2棟	廿日市市宮島町	昭53.1.21	主屋／入母屋造，妻入，桟瓦及び鉄板葺 表門／一間薬医門		表門に元禄16年（1702）の祈鑄札があり，主屋と表門ともに江戸時代（1603～1867）の建物と考えられる。 主屋正面妻には豕叉首（さす）に梅鉢懸魚をつけ南側正面の千鳥破風のついた玄関には式台をもうけ，木連格子，かぶら懸魚を備えて社家らしい風格を感じる。 表門は小さな薬医門で正規の手法で作られている。建築年代も古く，全国的にも数少ない社家の遺例の一つで，屋敷割や石垣などもよく残っている。 林家は古くから厳島神社の神官を勤め，神官団の上層部のひとりであった。		
国	重要文化財（建造物）	旧旃山家住宅	きゅうはたやまけじゅうたく	1棟	三次市三良坂町灰塚	昭53.1.21	桁行15m，梁間9.1m，入母屋造，茅葺		建築年代を示す資料はないが，手法から江戸時代，18世紀中頃の建築と考えられる。平面は整形四間取で，入口を入った左手にかなり広い土間をもち，右手に床上部が連なる。上屋柱は適当な間隔で比較的整形に残存しており，それは土間では太い多角形の曲がり材を多用しているが，床上部では整形された飽（かんな）仕上げのものを用いている。実年代はさして古くないが，構造手法に相当古風なものを残しているのがこの家の特徴である。 平成12年（2000），現在地に移築された。		内部見学は事前に連絡が必要（三次市教育委員会　電話0824-64-0092）
国	重要文化財（建造物）	奥家住宅 主屋　1棟 附　本宅普請万覚帳　1冊 土蔵　1棟 附　本宅普請萬覚帳　1冊 附　家相略図　1枚 宅地　1,889.25平方メートル	おくけじゅうたく	2棟	三次市吉舎町敷地	昭53.1.21 平28.7.25（追加指定）	桁行16.1m，梁間9.2m，入母屋造，茅葺，四面庇付，桟瓦葺 台所部／桁行6.3m，梁間10.0m，両下造，南面主要部に接続，桟瓦及び鉄板葺		江戸時代，天明8年（1788）の建築で，建築年代の明確な民家としては数少ないもののひとつである。普請帖（ふしんちょう）と，小屋裏棟束（こやうらむねづか）に棟札が残されている。 間取りは六間取に台所がある形で，規模の大きい当初の形をよく残している。構造は内法をすべて差鴨居でかため，柱数も少ない上等な構である。主屋内に入って見応えがあるのは土間上の梁組みで，太い梁が互い違いに五重におよび，頑丈に組み上げられた姿は圧巻である。建築年代も明らかであって，この地方の民家を代表するものである。		
国	重要文化財（建造物）	旧真野家住宅	きゅうしんのけじゅうたく	1棟	三次市小田幸町大平 広島県みよし風土記の丘構内	昭49.4.25（県指定） 昭55.1.26	木造平屋，入母屋造，平入り，茅葺，桁行14.9m，梁間8.9m		構造がきわめて古く，各所に古式を残しており，江戸時代，17世紀後半頃または更にさかのぼるとの説もある。主屋の表側を除く三方はすべて大壁となり，小舞は雑木や丸竹を混用し，大壁の塗厚は20cm以上である。架構は梁行が二張間で，二ヶ所だけ梁受桁を用いて柱を抜いているほか，すべての柱が原型どおり整然と並んでいる。奥の「でい」と言われる室にはこの時代としては珍しく床の間があった痕跡がある。 この建物はもとは世羅郡世羅町戸張に建っていたのをみよし風土記の丘構内に移築したものである。		関連施設：広島県立歴史民俗資料館（0824-66-2881）
国	重要文化財（建造物）	桂濱神社本殿 附　宮殿　3基 棟札　1枚	かつらはまじんじゃほんでん	1棟	呉市倉橋町字宮の浦	昭56.11.6 昭57.6.11	本殿／三間社流造，こけら葺 宮殿／各一間社流見世棚造，板葺		戦国時代，文明12年（1480）再建の神社建築。桂が浜に面した小高い丘陵上に建っている。 前室付の三間社流造，こけら葺で，庇（前室）の三方に縁を巡らす。身舎（もや），庇はいずれも丸柱からなり，身舎，庇とも板張の床で，身舎は一段高くなっている。 身舎正面に祭壇を構え玉殿三棟を安置している。この玉殿は一間社見世棚造（いっけんしゃみせだなづくり），薄長板葺の珍しいもので，本殿建立と同時期のものと考えられる。 本殿は地方色が濃厚な建物で，全体に木細く，簡素な作りではあるが意匠的にも優れた建物である。		
国	重要文化財（建造物）	竹林寺本堂 附　厨子　1基 棟札　1枚	ちくりんじほんどう	1棟	東広島市河内町入野	昭42.5.8（県指定） 昭57.6.11	本堂／桁行三間，梁間三間，一重，寄棟造，向拝一間，こけら葺 厨子／桁行一間，梁間一間，入母屋造，妻入，板葺		標高535mの篭山（たかむらやま）山頂に建つ16世紀の建物で，永正8年（1511）に屋根や柱組みが造られた後，天文14年から17年（1533～1536）頃須弥壇などを整えて完成した。須弥壇腰板裏に天文14年の墨書があり，高屋や入野の大工が工事にあたったことが分かる。 規模の大きな方三間の堂で，軒先など当初の材がよく残されている。木割が太いので比較的しっかりした感がある。16世紀の瀬戸内地方の寺院建築の好例である。 竹林寺は真言宗寺院で，中世には平賀氏の祈願寺のひとつであった。		
国	重要文化財（建造物）	春風館頼家住宅　※頼は旧字 主屋（附　幣串2本）　1棟 長屋門　1棟 裏座敷（附　裏座敷建築諸筆記1冊）　1棟 納戸蔵（附　棟札1枚，幣串1本，納戸蔵井隣屋譜講控1冊）　1棟 米蔵（附幣串1本）　1棟 附　土塀　4棟 臼場　1棟	しゅんぷうかんらいけじゅうたく	5棟	竹原市竹原町	昭62.3.30（県指定） 昭63.12.19	主屋／木造，切妻造，本瓦及び桟瓦葺		春風館頼家住宅と復古館頼家住宅は江戸時代末期から明治時代の住宅で，竹原市竹原地区重要伝統的建造物群保存地区内にある。 春風館は，頼山陽の叔父で広島藩の儒医であった頼春風の居宅として建てられた。現在の主屋は安政2年（1855）に再建されたものである。屋敷構えは道路に面して長屋門を建て，その奥に主屋を配していて，武家屋敷に似ている。主屋の背後には裏座敷，納戸蔵，米蔵などの附属屋をもち，主屋の座敷の前後には飛石や手水鉢を配した庭をつくるなど，規模の大きな上層の町屋の特徴をよく示している。		
国	重要文化財（建造物）	復古館頼家住宅　※頼は旧字 主屋（附幣串1本）　1棟 表屋及び玄関（附棟札1枚，幣串1本，酒場改築普請帖1冊）　1棟 米蔵（附幣串1本）　1棟 臼場（附幣串1本）　1棟 附　土塀　3棟	ふっこかんらいけじゅうたく	4棟	竹原市竹原町	昭62.3.30（県指定） 昭63.12.19	主屋／二階建，切妻造，桟瓦葺，塗屋造		復古館は，春風館の西隣にある。江戸時代後期の文人，頼春風の孫の三郎が分家独立して現在の屋敷を構え，酒造業や製塩業を営んだ。 主屋は安政6年（1859）の建築である。春風館と異なり，道路に面して表屋（店舗），その奥に主屋を配し，両者を玄関で接続する，いわゆる表屋造で，大きな商家にみられる形式によっている。主屋，表屋の西側や背後に臼湯，米蔵などの附属物が建つが，酒蔵などの一部は現在なくなっている。主屋の座敷の前後に庭園をつくっている。復古館は建物の質がよく，家業を反映して表屋造となっており，武家屋敷風の構えの春風館と好対照をなしている。		
国	重要文化財（建造物）	吉原家住宅 主屋（附便所1棟）　1棟 納屋（附棟札1枚）　1棟 附鎮守社　1棟 家相図　5棟	よしはらけじゅうたく	2棟	尾道市向島町江奥	昭46.4.30（県指定） 平3.5.31	主屋／桁行20.1m，梁間9.1m，寄棟造，茅葺，西面下屋附属，本瓦葺 納屋／桁行9.9m，梁間4.0m，切妻造，本瓦葺 鎮守社／一間社流見世棚造，鉄板葺		向島の豪農であった吉原家の住宅で，同家に伝わる祈祷札などから江戸時代，寛永12年（1635）の建築と思われる。規模の大きい整形六間取りに土間を持ち式台の痕跡もたどれる建物である。土間の中央には柱を建てず，二重の梁組で大きな空間を構成しており，当時としてはかなり上等な構造である。土間脇に建具はなく，ごく初期の段階では土間に格子（こうし）戸や格子窓，その上部に小壁もない時代があった古い農家の伝統をそのまま伝えていると思われ，瀬戸内海沿岸の民家の形態をよく保存している。		

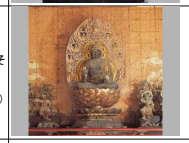
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（建造物）	太田家住宅 主屋　1棟 炊事場　1棟 西蔵（附棟札1枚）　1棟 釜屋　1棟 南保命酒蔵　1棟 北保命酒蔵（附棟札1枚）　1棟 東保命酒蔵（附棟札1枚）　1棟 北土蔵　1棟 新蔵　1棟 附　茶室　1棟 高塀　1棟	おおたけじゅうたく	9棟	福山市鞆町鞆	平3.5.31	主屋／桁行14.7m，梁間12.9m，二階建，南面入母屋造，北面切妻造，東南西各面庇付，本瓦葺 炊事場／桁行4.1m，梁間6.0m，北面庇付，二階建，南面入母屋造，北面切妻造，本瓦葺 西蔵／土蔵造，桁行7.3m，梁間6.0m，二階建，切妻造，本瓦葺 釜屋／土蔵造，桁行6.0m，梁間5.0m，二階建，切妻造，本瓦葺 南保命酒蔵／土蔵造，桁行13.8m，梁間5.9m，二階建，切妻造，妻入，本瓦葺 北保命酒蔵／土蔵造，桁行15.1m，梁間5.9m，二階建，切妻造，本瓦葺 東保命酒蔵／土蔵造，桁行14		鞆の名産品・保命酒の製造を行っていた中村家の旧宅で，後に太田家の所有となった。江戸時代，18世紀後半から19世紀前期までの建物で構成される。敷地の東西隅に東向きに主屋が建ち，通り沿いに敷地を囲うように附属屋が建つ。主屋の北側に新蔵が建ち，その間を高塀でつなぎ，南側は主屋の西に炊事場，湯殿が，西側は南から西蔵，釜屋，土塀，南保命酒蔵，北保命酒蔵が，北側には北保命酒蔵と北土蔵が並ぶ。敷地を囲むように土蔵が建ち並ぶ姿は壮観で，江戸時代中期から後期（17世紀後半～19世紀前半）にかけて酒造業で栄えた商家の構えをよく残しており，鞆の歴史的町並みを成す町屋として貴重な民家である。		内部公開（有料、問合せ先：084-982-3553）
国	重要文化財（建造物）	太田家住宅朝宗亭 主屋　1棟 門屋　1棟 離屋　1棟	おおたけじゅうたくちょうそうてい	3棟	福山市鞆町鞆	平3.5.31	主屋／桁行13.8m，梁間10.0m，一部二階，西面切妻造，東面入母屋造，妻入，南東北各面庇付，本瓦葺 門屋／桁行5.9m，梁間2.6m，二階建，切妻造，西面庇付，本瓦葺 離屋／桁行6.0m，梁間7.9m，二階建，入母屋造，北面切妻造，西面庇付，本瓦葺		太田家住宅朝宗亭は，本宅と道路をはさんで東側に建てられた別宅で，藩主の来訪の際に使用されていた。敷地の西側道路に面して門屋と離屋が並び，門屋の奥に主屋が建てられている。主屋，門屋とも江戸時代，享和元年（1801）頃の建設と考えられる。主屋の東と南は港に面した庭となっていて，前望が開けている。座敷などの造りも良く，本宅ともに鞆の町並みの主要部を構成する町家として価値が高い。		
国	重要文化財（建造物）	國前寺 本堂　1棟 庫裏　1棟	こくぜんじ	2棟	広島市東区山根町	平5.12.9	本堂／桁行24.0m，梁間14.0m，二重，寄棟造，唐破風造向拝一間，背面仏間突出，桁行5.3m，梁間9.8m，一重，寄棟造，本瓦葺 庫裏／桁行17.7m，梁間13.2m，一重，切妻造，妻入，東側面庇付，本瓦葺，正面庇，本堂間廊下及び正面東方土塀附属		本堂は寛文11年（1671）建立。寄棟造りの二重屋根で，向拝（こうはい）は唐破風造り，錣（しころ）葺きの屋根をもつ仏間が背面に突出している。全体的には住宅風な意匠で造られている。庫裏（くり）は切妻造りに錣葺きの屋根をもち，破風を漆喰で塗り込めている。 いずれも広島藩の日蓮宗寺院の中でも大規模なもので，藩を代表する近世の社寺建築として価値が高い。 國前寺は，暦応3年（1340）日蓮宗寺院・暁忍寺として開かれたが，明暦2年（1656），広島藩二代藩主の浅野光晟（あさのみつあきら）夫人の菩提寺（ぼだいじ）となり，現在の寺名となった。 ※錣葺（しころぶき）…屋根の途中で段がつく葺き方		
国	重要文化財（建造物）	浄土寺 方丈　1棟 唐門　1棟 庫裏及び客殿　1棟 宝庫　1棟 裏門　1棟 露滴庵　1棟 附中門　1棟 棟札　2枚 旧食堂厨子及び須弥壇　1具	じょうどじ	6棟	尾道市東久保町	昭63.12.26（県指定） 平6.7.12	方丈／桁行16.0m，梁間13.0m，一重，寄棟造，本瓦錣葺 唐門／一間向い唐門，本瓦葺 庫裏及び客殿／角屋付き庫裏と客殿の複合建築，切妻造，本瓦葺。 宝庫／土蔵造，桁行6.0m，梁間3.9m，二階建，切妻造，本瓦葺 裏門／長屋門，桁行14.9m，梁間5.0m，切妻造，本瓦葺 露滴庵／三畳台目茶室，水屋及び四畳・四畳半の勝手よりなる，一重，入母屋造，茅葺		浄土寺は鎌倉時代（1192～1332）に始まり，尾道を代表する古刹（こさつ）の一つである。境内には本堂，多宝塔や阿弥陀堂などの中世建築と方丈などの近世建築がよく残され，統一された寺院建築群となっている。 庫裏（くり）及び客殿は享保4年（1719）建立，方丈は元禄3年（1690）尾道の豪商である橋本家が施主となって再建された。 露滴庵（ろてきあん）は，三畳台目の席に水屋と後補の勝手を付属させた茶室である。豊臣秀吉が桃山城内に建てた茶室「燕庵」を移したものと伝え，文化11年（1814）向島の天満屋が浄土寺に寄進したという。いわゆる織部（おりべ）好みの風格のある建物である。 唐門は総ケヤキ作りの小さな一間の向唐門で正徳2年（1712）建築，宝庫は二階建て土蔵で，宝暦9年（1759）建築。裏門は長屋門で18世紀後期の建築である。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
国	重要文化財（建造物）	旧呉鎮守府司令長官官舎（呉市入船山記念館） 洋館1棟，和館1棟	きゅうくれちんじゅふしれいちょうかんかんしゃ（くれしいりふねやまきねんかん）	2棟	呉市幸町	昭43.1.12（県指定） 平10.12.25	洋館／木造，建築面積223.0㎡，一階建，スレート葺 和館／木造，建築面積304.1㎡，一階建，桟瓦葺		明治38年（1905）の建築。木造平屋建てで，和館と洋館を接合した建物である。表に洋館，奥に和館があり，洋館正面中央にポーチと玄関，玄関奥に広間公室がある。 入船山はゆるやかな丘陵地で，旧海軍呉鎮守府開設にあたり軍政会議所が建てられた。明治38年（1905）6月2日の芸予地震の後に現存の建物が再建され，以後，歴代の呉鎮守府司令長官官舎として使用された。 戦後，和館は改造されたが，洋館はよく残されており，明治時代末期の建築技術を示す貴重な例となっている。		関連施設：呉市入船山記念館（0823-21-1037）
国	重要文化財（建造物）	本庄水源地堰堤水道施設 堰堤（堤体本体，取水塔よりなる）1基，丸井戸1基，第1量水井（鋳鉄製配管，仕切弁2基を含む）1基，階段1基	ほんじょうすいげんちえんていすいどうしせつ	1構	呉市焼山北三丁目　水道用地1542番1の一部	平11.5.13	重力式コンクリート造堰堤		呉へ給水するため海軍が建造した水道施設。大正元年（1912）着工，同7年（1918）2月に完成した。完成当時は東洋一といわれた大規模なもので，本庄水源地の完成により，軍用水の余りが呉市に分けられ，市民への水道給水が始められることとなった。 緩やかなカーブを描く堰堤の表面は，現場で採集された花こう岩の切石で覆われ，重厚な印象を与えている。 当時の土木技術の水準を示すとともに，完成当時の関連施設が残されている貴重な例である。		
国	重要文化財（建造物）	福成寺本堂内厨子及び須弥壇 附　鬼板　1点 板絵（応永二十一年）10枚	ふくじょうじほんどうないずしおよびしゅみだん	1具	東広島市西条町下三永字西谷	平12.12.4	入母屋造，妻入り，一間厨子，禅宗様須弥壇		須弥壇とその上に置かれた厨子１具で，厨子内部には福成寺本尊の千手観音菩薩が安置されている。15世紀前期に造られたと推定される。 厨子は入母屋造，板葺，妻入の宮殿（くうでん）形式であり，また，垂木（たるき）木口（こぐち）の飾金具に，瀬戸内西部地方の大守護大名・大内氏の家紋である唐花菱紋（からはなびしもん）があり，その形が応永27年（1420）大内盛見（おおうちもりはる）寄進の豊前国（大分県）宇佐八幡宮所蔵の御輿の唐花菱紋飾金具に酷似していることから，当時の大内氏当主・大内盛見が強く関与して造られたと考えられる。 なお，附の板絵は応永21年（1414）頃の製作である。 福成寺は東広島市の東南端に位置する真言宗寺院である。中世には西条盆地を政治的拠点とした大内氏により，この地域の宗教的拠点として保護された。		関連施設：福成寺宝物収蔵庫（082-426-0523，082-423-3486）

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（建造物）	旧澤原家住宅 主屋　1棟 前座敷　1棟 表門　1棟 元蔵　1棟 三角蔵　1棟 三ツ蔵（上蔵，中蔵，下蔵）　3棟 新蔵　1棟 附　中門　1棟 社　1棟 土塀　1棟 塀　1棟	きゅうさわはらけじゅうたく	9棟	呉市長ノ木町	平17.7.22	主屋/桁行17.8m，梁間15.4m，二階建，西面入母屋造，東面切妻造落棟，妻入，四面庇付，北面部屋，南東隅台所附属，本瓦・桟瓦及び鉄板葺，西面突出部　桁行6.7m，梁間4.8m，入母屋造、便所及び門塀附属，桟瓦葺 前座敷/桁行18.3m，梁間8.7m，入母屋造，東面便所，南面門塀，北面渡廊下附属，西面突出部，桁行3.9m，梁間5.2m，入母屋造，北面突出部　桁行0.9m，梁間5.8m，両下造，桟瓦及び銅板葺 表門/一間薬医門，切妻造，桟瓦葺，左右屋根塀，南方築地塀附属 元蔵/土蔵造，桁行11.5m，梁間4.8m，二階建，切妻造，本瓦葺 三角蔵/土蔵造，桁行5.5m，梁間3.8m，二階建，切妻造，西面及び北面庇附属，鉄板葺 三ツ蔵/上蔵，中蔵，下蔵よりなる 上蔵　土蔵造，桁行9.5m，梁間4.8m，二階建，切妻造，本瓦葺 中蔵　土蔵造，桁行6.7m，梁間4.3m，二階建，切妻造，東面前室　桁行5.9m，梁間2.6m，片流れ，本瓦葺 下蔵　土蔵造，桁行9.5m，梁間4.8m，二階建，切妻造，本瓦葺 新蔵/土蔵造，桁行7.6m，梁間4.8m，切妻造，本瓦葺 附　・中門　一棟　一間腕木門，切妻造，潜戸付，桟瓦葺 ・社　一棟　一間社流造，桟瓦葺 ・土塀　一棟　三角蔵東方折曲り延長27.4m，桟瓦葺 ・塀　一棟　主屋北方5.9m，桟瓦葺 宅地　2222.89㎡　地域内の石段，石垣を含む		澤原家は，屋号を澤田屋と称した商家で，代々庄屋などの要職を務めた。 宅地は，街道を挟んだ東と西に構える。主屋等は東側にあり，主屋南に前座敷、表門、三角蔵、北に元蔵を配する。街道の西側には三ツ蔵と新蔵がある。建築年代は主屋が宝暦6年(1756)，前座敷と表門が文化2年(1805)，三ツ蔵が文化6年(1809)，元蔵が天保4年(1833)である。 主屋は，主体部が妻入の二階建で，四面に下屋を廻した形式である。前座敷は藩主の休憩所，宿所として建てられたもので，御成間がある。また，三棟並列型の三ツ蔵は，類例が少ない特徴ある建物である。 旧澤原家住宅は，中国地方を代表する大規模商家の一つとして重要である。		
国	重要文化財（建造物）	広島平和記念資料館	ひろしまへいわきねんしりょうかん	1棟	広島市中区中島町	平18.7.5	鉄筋コンクリート造，二階建，一部三階，高さ16.8m		広島平和記念資料館は，平和記念公園の中心施設である。 実施設計は丹下健三（たんげけんぞう）が行い，昭和26年2月に着工され，昭和30年8月24日に開館した。 広島平和記念都市建設法に基づき最初に着手された平和記念施設で，都市と一帯となった建築物として構想されており，ピロティの造形やルーバーの意匠などに丹下健三の建築的特徴がよく示されている。また，国際的に高い評価を受けた最初の戦後建築であり，丹下健三の出発点となる建築として重要である。		関連施設：広島平和記念資料館（082-241-4004）
国	重要文化財（建造物）	世界平和記念聖堂	せかいへいわきねんせいどう	1棟	広島市中区幟町	平18.7.5	三廊式教会堂，鉄筋コンクリート造， 地上三階，地下一階，銅板葺，塔屋付		世界平和記念聖堂は，原爆犠牲者を弔い，世界平和の実現を祈念する場として企図された教会堂で，被爆都市広島における戦後復興建築の先駆的建築である。 設計は村野藤吾（むらの　とうご）が行い，昭和25年（1954）8月6日定礎，同29年（1950）8月6日に献堂された。 堂，塔，小聖堂等の構成や量的比例も優れており，鉄筋コンクリートの柱梁フレームにセメントモルタルレンガを充填する新しい手法により，日本的性格と記念建築の荘厳さを持たせつつ，戦後の新しい時代に適応した宗教建築を実現したことで評価される。また，戦後村野藤吾の宗教的空間や公共的建築の原点となる作品としても重要である。		
国	重要文化財（建造物）	常称寺 本堂1棟 観音堂1棟 鐘撞堂1棟 大門1棟 附　墓処門1棟	じょうしょうじ ほんどう かんのんどう かねつきどう だいもん	4棟	尾道市西久保町	平19.12.4	本　堂　桁行五間，梁間六間，一重，入母屋造，本瓦葺 観音堂　桁行三間，梁間三間，一重，宝形造， 向拝一間，本瓦葺 鐘撞堂　桁行一間，梁間一間，一重，入母屋造，本瓦葺 大　門　四脚門，切妻造，本瓦葺 附・墓処門　一間薬医門，本瓦葺		常称寺は，鎌倉時代後期の正応年間（1288～93年）に，時宗二代・真教によって創建されたと伝えられる寺院である。本堂は室町中期，観音堂は室町後期，鐘撞堂は江戸前期，大門は室町前期の建築とみられる。それぞれの建物は，後世の改造を受けながらも多くの当初材を残しており，往時の姿をよく伝えている。 本堂は，外観を和様，内部構成を禅宗様とし，内陣・外陣と脇陣を一体的空間とするなど，中世時宗本堂の特徴をよく表している。また大門は，現存する常称寺の建造物のなかでは最も古く，その重厚な構えは当時の寺格の高さを体現している。観音堂や鐘撞堂も，各時代の尾道周辺地域の意匠的特徴を備えており，当地域における建築文化の様相を示す貴重な遺構である。 中世時宗寺院は全国的に遺存例が少なく，そのなかでも室町時代の遺構が3棟も残っている例は希少である。また，室町前期から江戸前期にわたって建てられた諸堂は，それぞれの時代的・地域的特徴をよく備えており，時宗寺院の伽藍構成の歴史的展開を理解する上で，学術的な価値が高い。		関連施設：おのみち歴史博物館（0848-37-6555）
国	重要文化財（建造物）	紅葉谷川庭園砂防施設 本堂 観音堂 鐘撞堂 大門	もみじだにがわていえんさぼうしせつ	1所	廿日市市宮島町	令和2年（2020）12月23日	石造及びコンクリート造、延長688.2m	延長688.2m	弥山から厳島神社の背後に流れくだる紅葉谷川に築かれる。昭和20年の枕崎台風で被災した「史蹟名勝厳島」の災害復旧事業として，昭和23年に着工，25年に竣工した。 砂防と庭園の専門家の協働により，土石流によって堆積した巨石を巧みに利用しながら，紅葉の名所として知られる紅葉谷公園の風景や厳島の歴史的風致との調和が図られた砂防施設である。 終戦直後の混乱期に，国及び地方政府と連合国最高司令官総司令部が連携して実現した，文化財の災害復旧事業としても貴重である。なお本件は，西海橋とならび戦後土木施設として初めての重要文化財指定である。		関連施設：宮島歴史民俗資料館（0829-44-2019）
国	重要文化財（建造物）	旧広島陸軍被服支廠倉庫施設 10番庫 11番庫 12番庫 13番庫	きゅうひろしまりぐんひふくししょうそうこしせつ	4棟	広島市南区出汐二丁目	令和6年（2024）1月19日	柱や梁、スラブなど主な構造を鉄筋コンクリート造（ぞう）とし、外壁などを煉瓦造（れんがぞう）とする		日露戦争後、陸軍における兵站施設の充実のため大正3年に建設された。陸軍本省が設計を掌り、陸軍大臣の令達により第五師団が実施設計と工事を担った。柱や梁、スラブなどを主な構造を鉄筋コンクリート造（ぞう）、外壁などを煉瓦造（れんがぞう）とする希少な建造物で、鉄筋コンクリート造として現存最古級。特異な形状の鉄筋を用いるカーン式鉄筋コンクリートの遺構としても希少。基礎に場所打ちコンクリート杭の嚆矢であるコンプレッソル杭を採用し、屋根はモルタル製の桟に引掛桟瓦（ひっかけさんがわら）を葺くなど、先駆的な技術を用いる。被爆後に臨時救護所となり、以降も継続して使用されてきた被爆建物である。旧陸軍被服廠の関連施設のうち、現存唯一の遺構としても歴史的に価値が高い。		（参考URL） https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/hihukushisyo/

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（建造物）	旧大浜埼通航潮流信号所施設 通航信号塔 昼間潮流信号機 夜間潮流信号塔（大浜埼灯台） 附・囲障（上段・下段） 検潮器浪除塔 附・旗竿 石垣（上段・中段・下段）	きゅうおおはまさきつうこうちょうりゅうしんごうしょしせつ つうこうしんごうとう ひるまちょうりゅうしんごうき やかんちょうしゅうしんごうとう（おおはまさきとうだい） けんちょうきなみよけとう	1棟3基	尾道市因島大浜町	令和6年（2024）8月15日			瀬戸内海の狭水道、布刈瀬戸に面した因島の北東端に位置する。航行船舶に交通状況や潮流の方向を告知するため設置した通航潮流信号所施設。明治43年の設置時に、通航信号塔及び昼間潮流信号機、検潮器浪除塔を新築し、同27年建設の灯台を転用して夜間潮流信号塔とした。通航信号塔は屋根上に3つの角塔を並べ、木板で○△□の記号を表示して対向船舶の位置を知らせた。現存唯一の本造信号塔として貴重。夜間潮流信号塔は信号所の廃止後、灯台として再度点灯した。近代交通標識の主要な施設が集約された本施設は、船舶の安全航行を支えた施設群として近代海上交通史上、価値が高い。		
国	重要文化財（絵画）	絹本紺地金彩弥陀三尊来迎図	けんぽんこんぢきんさいみださんぞんらいごうず	1幀	廿日市市宮島町	明32.8.1	絹本紺地金彩	縦69cm，横36cm	来迎図とは，往生者を浄土へ引接(いんじょう)する阿弥陀等の姿を描いたもので，浄土教の影響により平安時代中期（10・11世紀）以降に盛行した絵画である。 本図は室町時代（1333～1572）の作で，笠後光（かさごこう）を背負った立姿の阿弥陀三尊来迎図である。各尊とも踏割蓮華座（ふみわりれんげざ）に立ち，右斜めから雲に乗って飛来する様を描いており，肉身は金泥塗で，着衣は截金（きりがね）で雷文・七宝文など美しく繊細な装飾を施している。背光は装飾的に真正面から描かれている。		
国	重要文化財（絵画）	絹本著色大通禅師像 附　紙本墨書大通禅師墨蹟1幅（丁亥四月一日トアリ） 紙本墨書大通禅師消息1幅（十二月十五日トアリ）	けんぽんちゃくしょくだいつうぜんじぞう	1幅	三原市高坂町許山	明43.4.20	絹本著色	縦103cm，横41cm	大通禅師愚中周及（ぐちゅうしゅうきゅう）は，室町時代（1333～1572）の禅僧で美濃（みの，現在の岐阜県）の人。はじめ京で夢窓疎石などについて修業したが，五山の禅風にあきたらず，中国の元(げん)に渡って金山の仏通禅師の法嗣をうけ，帰朝して五山の外にあって清新な宗風をおこし，応永16年（1409）87歳で没した。 この画像は禅僧の肖像画すなわち頂相(ちんぞう)であり，小早川春平が描いた像に，周及が賛を書いて修業皆伝の証としたもので，脱俗ひょう逸な禅師のすがたを目のあたりに見るようである。 附の墨蹟(ぼくせき)は，応永14年（1407）周及晩年の筆で「病僧周及」と署名がある。同じく附の消息は応永15年（1408）京で将軍足利義持（在任1394～1423）に教えを説いたころのものとされる。		
国	重要文化財（絵画）	絹本著色小早川隆景像 文禄三年ノ賛アリ	けんぽんちゃくしょくこばやかわたかかげぞう	1幅	三原市沼田東町納所	明43.4.20	絹本著色，軸装	本絹縦104.7cm×横42.2cm	安土桃山時代（1573～1602）の文禄3年（1594）に描かれた小早川隆景の寿像（じゅぞう）。京都大徳寺の塔頭（たっちゅう）黄梅院の玉仲が賛を記している。中啓（ちゅうけい）を持ち黒の袍（ほう）をつけて座した束帯の姿である。 この画を伝える米山寺（べいさんじ）は小早川氏の氏寺であった。 ※寿像（じゅぞう）…生前に描かれた肖像画。 ※小早川隆景（1533～1597）…毛利元就の三男。小早川氏の養子となり，後，毛利氏領国支配の一翼を担った。		
国	重要文化財（絵画）	絹本著色仏涅槃図	けんぽんちゃくしょくぶつねはんず	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	明45.2.8	絹本，八相涅槃図	縦152.4cm，横140.7cm	涅槃図は，釈迦の入滅つまり涅槃の態様を描いた図で，涅槃会（ねはんえ）の本尊として用いられるため，遺品は11世紀からあり鳥獣の数が次第に増加しその形状も横長構図から縦長構図に推移している。 本品は，ほぼ正方形の形状をした鎌倉時代，13世紀中頃の作である。元は大阪の神峯山寺に伝来したとされている。 八相涅槃図と称され，釈尊のこの世における主要な事跡八種を入涅槃を中心に構成した図である。浄土寺本（重文）では八相を別の区画の中に描いているが，この図では区画を設けず配置しており，明恵上人作の涅槃講式の説と一致し，宋，元の涅槃図の影響を受けて成立したと推定される。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	重要文化財（絵画）	紙本著色三十六歌仙切 佐竹家伝来	しほんちゃくしょくさんじゅうろっかせんぎれ	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.5.6	紙本，幅仕立	縦35.5cm，横78.2cm。	鎌倉時代（1192～1332）に流行した歌仙絵巻の一部分である。元来上下2巻であったが，京都賀茂神社から佐竹家に移管された際，1人ずつ切りはなし掛幅仕立とした。類品中でも最も傑出するもので，書は京極良経（きょうごくよりつね），絵は藤原信実（ふじわらののぶざね）の筆になると伝えられる。 本寺所蔵の貫之（つらゆき）の書部分は，室町時代（1333～1572）に補筆されたものである。 三十六歌仙とは，平安時代中頃（10世紀末）に藤原公任が選んだとされる代表的歌人36人のことである。 ※藤原信実（1177～？）…鎌倉時代の絵師・歌人 ※紀貫之（868?～945?）…平安時代初期の歌人		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	重要文化財（絵画）	絹本著色山姥図 長沢芦雪筆	けんぽんちゃくしょくやまうばのず	1面	廿日市市宮島町	昭31.6.28	絹本著色	縦150cm，横83cm	江戸時代後期，寛政9年（1797）作の長沢盧雪（ながさわろせつ，1755～1799年）の画である。近松門左衛門の浄瑠璃（じょうるり）「嫗山姥」（おうなやまうば）から画題をとり，醜怪な老婆を迫力のある筆致で描いた盧雪晩年の傑作である。 盧雪は広島地方に遊び，寛政6年（1794）の紀年のある「絹本淡彩宮島八景図」（重文）など多くの作品を残している。本図も広島滞留時の作品で，額裏の寄進銘によると，寛政9年5月に，広島の町人三国屋栄治郎他9名が神社に奉納したことが記されている。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（絵画）	絹本著色千手千眼観音像	けんぽんちゃくしょくせんじゅせんがんかんのんぞう	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭35.6.9	絹本著色	縦124cm，横54cm	鎌倉時代（1192～1332）の作。千手観音の図像のほとんど唯一といってよい実例で，正確に千臂（ひ）千眼が描かれている。おそらく鎌倉時代初期，13世紀に日本列島にもたらされた中国の宋代の原本を，忠実に模写したものであろうかと思われる。筆法の厳格さと構図の巧妙さは類例のないすぐれた作品と言える。 千手観音の千とは無量と円満の意味であり，その造像にあたっては，十八や十四に略して造られ，千手の実例は唐招提寺に見られるのみである。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	重要文化財（絵画）	絹本著色仏涅槃図 左右下の各縁に涅槃の諸相がある 附　旧軸木　1本 文永十一年粉河寺僧随覚房云々の記がある	けんぽんちゃくしょくぶつねはんず	1幅	尾道市東久保町	昭43.4.25		縦174.5cm，横133.5cm	鎌倉時代，文永11年（1274）製作。 本図のように涅槃に関係の深い多くの説話を図のまわりに廻らしている例は少ない。図の左側八段には主として入涅槃前の事蹟を，右側には涅槃後摩耶夫人に対する再生説法の場面を中心に描いている。 本図は古典的涅槃図の構成を脱して次第に数多くの禽獣を描きこむ過程を示している点にも注目され，人物描写にも新渡（しんと）の宋画の暈（ぼかし）どりを用いている。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（絵画）	紙本白描遊行上人絵 巻第二，第五，第六，第八	しほんはくびょうゆぎょうしょうにんえ	4巻	尾道市西久保町	昭53.6.15	巻第二／本紙々継24枚，詞4段，絵4段 巻第五／ 巻第六／本紙々継19枚，詞4段，絵3段 巻第六／本紙々継17枚，詞2段，絵1段 巻第八／本紙々継24枚，詞3段，絵3段	縦30.2cm 長さ／巻第二1,070.5cm，第五920.0cm，第六861.5cm，第八1,202.0cm	南北朝時代（1333～1392）の頃の作と考えられる。 時宗の一遍関係の伝記絵巻は，聖戒編の「一遍聖絵十二巻」と宗俊編「遊行上人絵十巻」の二系統が伝わっているが，本品は一遍と他阿の伝記をあらわした宗俊系統の，全巻白描の画法による珍しい絵巻である。特に，技法として新しく渡来した水彩画の手法と大和絵との融合をはかった画風は独特である。 ※白描…絵の技法の一つ。墨線と墨の濃淡で表現する。		
国	重要文化財（絵画）	絹本著色両界曼荼羅図 附　旧軸木　2本 　文保元年二月益円の銘がある	けんぽんちゃくしょくりょうかいまんだらず	2幅	尾道市東久保町	昭53.6.15	胎蔵界／画絹四副一鋪 金剛界／画絹四副半一鋪	胎蔵界／縦263.0cm，横183.5cm 金剛界／縦251.0cm，横185.0cm 旧軸木／軸長各184.0cm，軸径各5.0cm	鎌倉時代の文保元年（1317）の作。 両界曼荼羅図で，描写は伝統的な手法により，重厚な筆致と鮮やかな彩色で，きわめて精緻に描かれている。諸尊像には補筆や補彩がなく，描表具や八双金具は当初のもので，軸木に墨書で「文保元年丁巳二月四日」の銘がある。 当時の懸曼荼羅の原形を伝える貴重な資料である。鎌倉時代末期の仏画で年紀のあるものが少ないことから考えると，制作年代が明確であり，基準作例としての価値は大きい。		関連施設：浄土寺宝物館 （0848-37-2361）
国	重要文化財（絵画）	紙本墨画淡彩四季山水図　六曲屏風	しほんぼくがたんさいしきさんすいず　ろっきょくびょうぶ	1双	廿日市市吉和　ウッドワン美術館	平12.12.4	紙本墨画淡彩，六曲一双，各扇紙継5枚	各縦150.4cm，横347.0cm	室町時代中期（15世紀前半）の画僧・周文（しゅうぶん）の作。 六曲一双の屏風に四季の移り変わりを描き出している。風景画の様式が定型化される狩野派以前の画風を伝える，美術史的にも貴重な作品である。 ※周文（生没年不詳）…京都相国寺の僧侶で画家。雪舟に影響を与えたといわれる。		関連施設：ウッドワン美術館 （0829-40-3001）
国	重要文化財（彫刻）	木造阿弥陀如来立像	もくぞうあみだにょらいりゅうぞう	1躯	廿日市市宮島町	明32.8.1	寄木造，漆箔	像高75cm 台座高さ49cm，光背高さ96cm。厨子高さ178cm，幅70cm。	光明院本尊で，来迎印を結んだ阿弥陀は，踏割蓮華座（ふみわりれんげざ）に立ち，迦陵（かりょう）・頻伽（びんが）を左右に，笠後光（かさごこう）を背負い，雲に乗って来迎する形を示している。漆箔で玉眼入り，截金（きりがね）彩色の精巧な作品で，大形の螺髪（らほつ）や衣文の様子から見て鎌倉時代末期（14世紀前半）の製作と思われる。 光明院は，戦国時代の天文年間（1532～1554）に以八上人が開いた浄土宗寺院。		
国	重要文化財（彫刻）	木造阿難尊者立像	もくぞうあなんそんじゃりゅうぞう	1躯	廿日市市宮島町	明32.8.1	寄木造，彩色	像高91cm	大願寺のこの仏像は木造釈迦如来坐像（伝僧行基作），木造迦葉尊者立像（ともに重文）と一具である。江戸時代までは厳島神社の大経堂本尊であったもので，阿難尊者立像は動きの多い衣をまとい，岩座に立ち合掌している。銅製耳輪は珍しい。鎌倉時代末期（14世紀前半）の作。		
国	重要文化財（彫刻）	木造迦葉尊者立像	もくぞうかしょうそんじゃりゅうぞう	1躯	廿日市市宮島町	明32.8.1	寄木造，彩色	像高91cm	大願寺のこの仏像は木造釈迦如来坐像（伝僧行基作），木造阿難尊者立像（ともに重文）と一具である。江戸時代までは厳島神社の大経堂本尊であったもので，迦葉尊者立像は動きの多い衣をまとい，手のひらを組み合わせ一歩足を踏み出す。鎌倉時代末期（14世紀前半）の作。		
国	重要文化財（彫刻）	木造釈迦如来坐像（伝僧行基作）	もくぞうしゃかにょらいざそう	1躯	廿日市市宮島町	明32.8.1	寄木造，彩色	像高85cm	大願寺のこの仏像は木造阿難尊者立像・木造迦葉尊者立像（ともに重文）と一具である。江戸時代までは厳島神社の大経堂本尊であったもので，木造粉溜の玉眼入り像である。中尊釈迦は衣文などにおだやかな作風を示す。鎌倉時代末期（14世紀前半）の作。		
国	重要文化財（彫刻）	木造薬師如来坐像（伝僧空海作）	もくぞうやくしにょらいざぞう	1躯	廿日市市宮島町	明32.8.1	木造，漆箔	像高50cm	厳島神社の修理勧進をつかさどっていた真言宗大願寺の本尊で，檜材の漆箔像。衣文はやや太いが流麗であり，面相にはおだやかな温かみがある。この像の構造は，頭と胴体を一本で割り矧（は）ぎし，膝の部分には横木を用いて，内刳（うちぐり）はきれいにさらえている。平安風の強い鎌倉時代初期（12世紀末～13世紀前半）の作。		
国	重要文化財（彫刻）	舞楽面 　貴徳1面,散手1面	ぶがくめん	2面	廿日市市宮島町	明32.8.1	木造漆地彩色		平安時代の承安3年（1173）8月，平家一門によって厳島神社に寄進された7面の内の2面。その精巧な彫技，薄手な軽快さは後代に見られない。		関連施設：厳島神社宝物館 （0829-44-2020）

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（彫刻）	釈迦及諸尊箱仏	しゃかおよびしょそんはこぼとけ	1面	廿日市市宮島町	明32.8.1		高さ21cm，幅17cm，厚さ4.7cm	中央の一群は如来を中心に十一尊を，左右は各五尊の像を各々一材の白檀から彫り出し，飛天や天王，花形のぶどう唐草文など簡勁古致（かんけいこち）な金銅金具で装飾された黒漆塗の箱に入れて，蝶番で接合した携帯用の厨子である。このような携帯用龕（がん）は，7世紀頃中央アジアから中国にかけて盛んに用いられ，本品も晩唐期（9世紀後半）の作と考えられる。あるいは平安貴族の念持（ねんじ）であったものを寄進したのであろうか。		関連施設：厳島神社宝物館 （0829-44-2020）
国	重要文化財（彫刻）	木造狛犬	もくぞうこまいぬ	14躯	廿日市市宮島町	明32.8.1	漆箔 小さい2躯は玉眼，極彩色	高さ21～61cm	平安時代末期から鎌倉時代（12世紀～14世紀前半）の大小種々の狛犬で，野坂文書や具注暦（ぐちゅうれき）裏書にその存在が記されている。嘉禎3年（1237）に作られた26頭の狛犬もこの中の一部をなしていると思われる。 この中で小さい2頭だけが玉眼入りの極彩色で，その彩色も塗りかえた形跡がある。胴部は漆箔，足の毛や立髪は緑青，舌や腹部は朱が塗られていたと思われる。21cmと小型であるところから，かつては玉殿（ぎょくでん）に置かれていたことも考えられる。		関連施設：厳島神社宝物館 （0829-44-2020）
国	重要文化財（彫刻）	舞楽面 二ノ舞2面，採桑老1面，納曽利1面，抜頭1面，環城楽1面，陵王1面	ぶがくめん	7面	廿日市市宮島町	明32.8.1	木造漆地彩色		採桑老（さいそうろう）と陵王（りょうおう）を除いた5面は，承安3年（1173）8月平家一門によって厳島神社に寄進されたもので，その精巧な彫技，薄手な軽快さは後代に見られない。中でも抜頭（ばっとう）は当時著名の仏師行命が京・尊勝寺（そんしょうじ）の面を範として作ったもので，さすがに出色のできばえである。この舞の二面に「盛国朝臣調進」，納曽利（のそり）に「台磐所調進」，還城楽（かんじょうがく）に「政所御寄進」などその寄進者銘が史的興味をそそる。 採桑老には鎌倉時代の建長元年（1249）の銘がある。		関連施設：厳島神社宝物館 （0829-44-2020）
国	重要文化財（彫刻）	木造飾馬	もくぞうかざりうま	1躯	廿日市市宮島町	明32.8.1	寄木造，玉眼，彩色	高さ82cm	この飾馬はもと大国神社拝殿に置かれていたものと伝えられ，その姿勢は引く力に対して抵抗しているような力強い姿で，鎌倉時代（1192～1332）の作風をよく示している。 檜材の寄木造で，すべてを白土の下地とし彩色をほどこし，墨漆覆輪の鞍をおいている。眼は玉眼で，立髪には毛のようなものを植え付け，飾りの木製古葉は欠失し，それを止めていた釘のみが残っている。 武士が飾り馬を神社に奉納した例は少なくないが，その最も古い優秀な作である。		関連施設：厳島神社宝物館 （0829-44-2020）
国	重要文化財（彫刻）	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうぞう	1躯	尾道市東久保町	明32.8.1	檜材，一木造	像高1.6m	浄土寺本堂の本尊で，定証起請文（じょうしょうきしょうもん）にある「本尊聖徳太子御作等身皆金色十一面観音像」と記されているのは，おそらく本像のことであろう。 檜材のこの像は，右手は施無畏（せむい）の印を，左手に開敷蓮華をさした花瓶（後補）をもつ。面相は豊満で，体躯は肥大充実し，刀法も鋭く，全身を金色の寂光に包まれた端厳な尊容の像である。平安時代も初期に近い頃（9世紀）のすぐれた作である。		33年に一度開帳 関連施設：浄土寺宝物館 （0848-37-2361）
国	重要文化財（彫刻）	木造釈迦如来立像（伝安阿弥作）	もくぞうしゃかにょらいりゅうぞう	1躯	尾道市西久保町	明32.8.1	寄木造，素木，玉眼	像高78cm	西國寺客殿脇間に安置されている仏像で，小柄ながらも秀麗な尊容に，よく調和のとれた彫りの深い流れるような衣文のヒダにも，鎌倉時代（1192～1332）の安阿弥流の特色がうかがわれる。 寺伝によると，本像は快慶の作と言い，かっては「うしとら坂」の釈迦堂の本尊であったが，御堂の炎上後，西國寺に安置することになったという。		
国	重要文化財（彫刻）	木造薬師如来坐像	もくぞうやくしにょらいざぞう	1躯	尾道市西久保町	明32.8.1	一木造	像高91cm，膝張り71cm	平安時代も初期に近い時期（9世紀）の秀作である。西國寺金堂の内陣須弥壇に安置されている本尊仏で，古来秘仏として伝来してきたものである。優麗ななかにも森厳にして荘重な趣をたたえた，重量感のある仏像で，螺髪（らほつ）は切付けで，彩色のない素木の古い高雅さが感ぜられる。 寺伝によると，讃岐善通寺（ぜんつうじ）から迎えた弘法大師の「七仏薬師」のひとつと言われる。		
国	重要文化財（彫刻）	木造千手観音立像	もくぞうせんじゅかんのんりゅうぞう	1躯	尾道市東土堂町	明32.8.1	一木造	像高106cm	平安時代（794～1191）の作。 千手観音で真数千手のものは数点しかなく，ほとんどが合掌手，宝鉢手の他に両脇に十九本の脇手がある四十二臂（ひ）像がごく一般的である。本像も四十二臂像で，彩色は剥落しているが，かえって木目が美しく効果的にあらわれている。 寺伝では行基菩薩作と言い，向島余崎城主で村上水軍の将鳥居資長が寄進したものと伝え，その念持仏として船中に護持し，風浪を凌いだので，「浪文観音」の俗称もある。		
国	重要文化財（彫刻）	木造十一面観音立像（伝僧最澄作）	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうぞう	1躯	福山市草戸町	明32.8.1	一木造	像高142cm	一木彫り。平安時代初期（9世紀）の作品で，台座も平安時代（794～1191）の作と考えられる。 明王院本堂の本尊として厨子に納められる。伝教大師の一刀三礼の作と伝承されている。 等身像で，頭上の十一面は後補が多いが，主体部は造立当初のものである。彩色は剥落しているが，深い彫りと強い線，均整のとれた姿態，柔和な面相と優麗な気品，また天衣（てんね）の翻転（はんてん）も巧みである。		

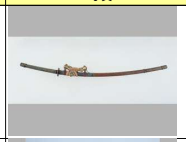
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（彫刻）	木造聖徳太子立像（開山堂安置） 乾元二年ノ銘アリ	もくぞうしょうとくたいしりゅうぞう	1幀	尾道市東久保町	大1.9.3	寄木造，玉眼，彩色，髪をみづらに結い，柄香炉を持つ。	像高94cm	鎌倉時代の乾元2年（1303），沙弥定証（じょうしょう）が息子の死後にその菩提を弔うために作らせた像といわれる。京の院派の仏師・院憲が作った。 「孝養像」と称されるもので，玉眼で彩色され，髪はみづらを結い，両手で柄香炉（えごろう）を持った姿である。胎内頭部に「乾元二年法印院憲作」という墨書がある。定証起請文（じょうしょうきしょうもん）に「聖徳太子十六歳御躰，京都仏師印憲作」というのは本像と思われる。 文献と銘文が照応する遺物は珍しい。鎌倉時代末期（14世紀前半）院派の佳作である。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
国	重要文化財（彫刻）	木造聖徳太子立像（開山堂安置）	もくぞうしょうとくたいしりゅうぞう	1躯	尾道市東久保町	大1.9.3	寄木造，玉眼，彩色，左手に柄香炉，右手に笏を持つ。	像高1.35m	南北朝時代，暦応2年（1339）の作で，胎内に墨書銘がある。 「摂政（せっしょう）像」と称せられるもので，玉眼で彩色されている。摂政像は必ず笏（しゃく）を両手で持っているのであるが，本像は左手に柄香炉（えごろう），右手に笏を持っており，摂政像の影響をうけた孝養像の一変形と思われ，同様のものは南北朝時代（1333～1392）前後からその例があらわれる。 同種の太子像中の秀作である。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
国	重要文化財（彫刻）	木造釈迦如来立像	もくぞうしゃかにょらいりゅうぞう	1躯	尾道市瀬戸田町瀬戸田	大4.3.26	本体・台座ともカヤの一木造	像高135cm	平安時代初期，9世紀の作と思われる作品で，当時の造像によく見られる本体と台座を榧（かや）の一木から彫り出した，重厚森厳な仏像である。もと伊勢神宮の神宮寺にあったものという。 釈迦牟尼（むに）とは「釈迦族の聖者」の意味で，苦行の後に悟りを得て慈悲と知慧（ちえ）により衆生（しゅじょう）を済度（さいど）した仏教の祖である。その釈尊は久遠常住（くおんじょうじゅう）の仏である釈迦如来として多くの経典の教主とされており，日本においても仏教伝来以後多くの造像が行われた。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	重要文化財（彫刻）	木造狛犬	もくぞうこまいぬ	1対	三原市八幡町宮内	大6.8.13	一対	高さ80cm	室町時代，嘉吉年間（1441～43）の作ともいう。もとは御調八幡宮本殿に安置されていた。社伝では足利八代将軍義政の寄進と言い，かって狛犬の腹部に「嘉吉―」の墨書が見えていたと言うが，今は見えない。 もとは彩色されていたが，現在は剥落し，ところどころにその痕跡を残すのみである。 御調八幡宮は奈良時代（710～793）の勧請といわれ，京都石清水八幡宮の別宮であった。		関連施設：御調八幡宮宝物収蔵庫（0848-65-8652）
国	重要文化財（彫刻）	木造薬師如来坐像	もくぞうやくしにょらいざぞう	1躯	広島市東区牛田新町三丁目	大6.8.13	檜材，寄木造，漆箔	像高140cm	平安時代初期（9世紀）の作で，宝徳2年（1450）に修復されている。 不動院金堂の本尊で檜材，漆箔塗り。火災二重円光を背にし，右手は施無畏（せむい）印，左手に薬壷をのせた面相が円満で，衣文の流麗な定朝様の仏像である。脇侍の日光・月光菩薩を欠いているが，その代わりに彫ったものであろうか，須弥壇の勾欄（こうらん）の中央に宝輪，その左右の雲上に日輪・月輪の彫刻がはめこんである。 台座敷茄子（なす）の獅子裏に「源雅信助口」の名や「宝徳二年十月日」の年号があり，光背（こうはい）の裏に朱書きで「大仏師右京左京」と記されており修補を物語っている。		
国	重要文化財（彫刻）	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	尾道市瀬戸田町御寺	昭3.8.17	寄木造，漆箔，玉眼	像高83cm	真言宗光明坊の本尊で，漆箔で玉眼入り。下品上生の印を結ぶこの仏像は，鎌倉時代（1192～1332）の作ではあるが，面相は丸味がありふっくらとしており，衣文の線もやわらかく，平安風の匂いを感ぜさせる秀作である。寺伝によると行基菩薩の作であるという。		
国	重要文化財（彫刻）	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうぞう	2躯	世羅郡世羅町甲山	昭3.8.17	桜材一木造，榧材一木造	像高189cm，170cm	今高野山観音堂の本尊で，一躯（写真右）は桜材で造られ両肩から腕まで共木を用い，胸の瓔珞（ようらく）も同じ木で彫り出す古様な手法である。天衣（てんね）や腕の彫り出しの仕方など一部に地方作風が見られるが，面相姿態がすこぶる端正優麗で，裳は赤，白，緑の草花文で美しく彩色されており，地方作としても中央に比較して遜色のない像である。昭和12年（1937）の修理の際，背面腹部の内刳（うちぐり）から延喜通宝が発見され，像の製作年代を知る重要な手がかりを与えた。 もう一躯（写真左）は榧材で，両肩で両手を矧（はぎ）着けており，彩色像であるが剥落がはなはだしい。簡素で素朴な造りである。 両像とも平安時代中期（10世紀）の作。		毎年8月20日のみ公開 関連施設：今高野山龍華寺収蔵庫（0847-22-0840）
国	重要文化財（彫刻）	木造浄土曼荼羅刻出龕	もくぞうじょうどまんだらこくしゅつがん	1基	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	檀木を用いて浄土曼荼羅を精巧に彫り出した小形の厨子	縦13.5cm，横14cm，奥行4cm	龕（がん）とは，本来は塔の下の室という意味で，厨子状に刳（く）られたくぼみの中に納められた像を龕像という。小型のものは諸国を巡る僧侶が携帯していた例が多い。 この龕は檀木を用いて浄土曼荼羅を精巧に彫り出した小形の厨子である。一木から宝楼閣や七宝の池などに，弥陀三尊をはじめ，十大弟子，二十五菩薩，四天，二力士など五十躯の諸尊や風首の舟などを克明に彫り起して極楽浄土を表現しており，すぐれた技法による精巧で構成の巧みな作品である。 平安時代，12世紀の作。厨子の裏面に「高野山無量寿院舳遍」の朱漆銘がある。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	重要文化財（彫刻）	木造聖徳太子立像（南無仏太子像） 頭部内面に建武五年十月廿四日院勢作ノ銘アリ	もくぞうしょうとくたいしりゅうぞう（なむたいしぞう）	1躯	尾道市東久保町	昭11.9.18	寄木造，玉眼，彩色	像高68cm	南北朝時代，建武5年（1337）の作。胎内頭部に「建武五年十月二十四日院勢作」の墨書銘がある。 「南無仏のお姿」と称されるもので，玉眼入りの彩色された像である。三歳の尊像と言われ，上半身は裸形で下半身に緋の裳を着け合掌する姿である。同じ胎内から出た三尊仏の印仏（いんぶつ）には，本寺重修に尽力した道蓮，道性の名も見られ，本寺と太子信仰の関係も察せられる貴重な作品である。なお，作者の院勢は，孝養像の作者院憲と同じく京都院派の著名な仏師である。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来立像 像内ニ藤原行光ノ願文及名号等ヲ納ム	もくぞうあみだにょらいりゅうぞう	1躯	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭14.9.8	寄木造，漆箔	像高60cm	鎌倉時代，天福元年(1233)の作。小像ではあるが，漆箔の上に精緻な截金(きりがね)を施した秀麗な安阿弥流のおだやかな作品で，胎内の空洞を金箔でほりつめた珍しい例の仏像である。 その胎内には承久元年(1219)に卒した藤原行光の自筆文書と千字の名号及び願文が納入されていた。願文には天福元年の年記があり，木像は，行光の十五回忌にその冥福を祈るために造顕されたものであることがわかる。 行光は源頼朝，義朝の縁につながる人物で，民部丞，政所執事，信濃守などの要職にあった。		関連施設:耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来及両脇侍像(古保利薬師堂安置)	もくぞうやくしにょらいおよびりょうわきじぞう	3躯	山県郡北広島町有田	昭17.12.22 昭37.2.2 (追加指定)	一木造	(薬師像)高122cm，膝張125cm (脇侍)高140cm	古保利(こほり)薬師堂は福光寺という大きな廃寺の跡にある。 薬師如来坐像は，いわゆる丈六の像で，膝の部分は別木であるが，体の主要部を一本の木から彫り出している。豊麗な顔，幅広な肩，厚みのある胸や腹，高い膝などが量感豊かに表現され，衣のひだは太く深く彫りこまれ，この像が平安時代初期(9世紀)の作であることを示し，その強い表現は貞観彫刻も早い頃の特色をそのまま伝えている。 脇侍の日光・月光菩薩は立像で，台座蓮肉まで共木で彫った平安時代初期の作風を伝える仏像である。		関連施設:古保利薬師収蔵庫(0826-72-5040(千代田歴史民俗資料館))
国	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来及両脇侍立像(本堂安置) 中尊像内に金胎五仏等種子及び文永十一年二月九日始，大仏師覚尊の銘がある 附　像内納入品 紙本阿弥陀経　6巻(血書1，墨書5，包紙添)文永十一年三月六日覚鍥の記がある 紙本墨書善光寺如来造立勧進帳　1通 紙本墨書念仏帳包紙添　1冊 紙本念仏記　3通(血書1，墨書2)内一通に文永十一年三月八日とある 紙本墨書願文　1通 袈裟　1領 横笛　1管 短刀柄付　1口 銅製鈴　1箇 紙胎漆塗箱　1合(以上中尊分) 紙本墨書仁王般若経　弘長二年覚鍥とある(左脇侍分) 珠数　1連(右脇侍分)	もくぞうあみだにょらいおよびりょうわきじりゅうぞう	3躯	福山市鞆町後地	昭17.12.22 昭43.4.25(像内納入品の一部を追加指定)	寄木造，漆箔，玉眼	本尊の高さ170cm，脇侍の高さ130cm	鎌倉時代，文永11年(1274)の作。 空蔵房寛覚ら三人が鞆に入港した船の乗客乗員など多くの人たちから勧進，平頼影を大壇那とし，大仏師覚尊によって造られ，金宝寺(安国寺の前身)に納められた。 一光三尊形の巨大な舟形光背(高さ306cm)を用いた善光寺如来である。善光寺如来は長野善光寺の像を模して鎌倉時代に盛んに作られた。その多くは銅製の小像であり，この像のような大きさのものは珍しい。 昭和24年(1949)に修理された際，中尊胎内から願文，勧進帳，血書も含む阿弥陀経6巻，般若心経1巻，念仏紙2枚，名号並びに和歌記入の冊子1冊，一貫張り被蓋黒漆塗箱一合(中に毛髪3包あり)，紙包27包(1包は毛髪のみ，他は毛髪と舎利)などが発見された。また脇侍観音胎内からも仁王般若経上下2巻などが発見され，当時の熱烈な信仰心を明らかにした。		
国	重要文化財(彫刻)	木造法燈国師坐像 附　水晶五輪塔(小箱添)1箇 紙本墨書梵字真言並仏眼禅師偈文　1通 建治元年十二月十八日覚心トアリ 紙本墨書仏像修理記　1通 寛文四年三月十五日トアリ	もくぞうほうとうこくしざぞう	1躯	福山市鞆町後地	昭17.12.22	寄木造，玉眼	高さ84cm	鞆安国寺に伝わる木像。寄木造，玉眼入り。 鎌倉時代(1192～1332)に盛んに作られた祖師像のひとつである。法澄国師は禅宗の僧侶であり，安国寺開山とされている。この像は建治元年(1275)法澄69才の時の像で，極めて写実的である。なお，法澄の像は和歌山県にも伝えられている。 像内には水晶五輪塔などが納められていた。水晶五輪塔は高さ6.7cm，鎌倉時代の作と推定されている。		
国	重要文化財(彫刻)	木造狛犬	もくぞうこまいぬ	3躯	福山市新市町宮内	昭17.12.22	寄木造，漆箔	像高／(阿)78cm，(吽)80cm，82cm	平安時代(794～1191)の作と思われる。 狛犬は，宮中や神社に置かれた守護獣の像で，獅子と狛犬の組合せは平安時代前期に確立したと思われる。一対でそれぞれ阿(あ)吽(うん)をあらわしたものを一対とするのが一般的である。 本品はいづれも対をなすものではなく，かつて対をなしていたものは，何らかの経緯で失なわれたのであろう。 吉備津神社蔵(東京国立博物館に貸出中)		
国	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音立像(観音堂安置)	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうぞう	1躯	世羅郡世羅町字赤屋	昭19.9.5	榧材，一木造	像高147cm	榧(かや)材の足部から蓮肉まで一木彫成(台座周囲は後補)という，平安時代初期(9世紀ころ)によく見られる技法の仏像である。 ずんぐりとした怒り肩の体躯に太い首，著しく奥行の深い頭部に眉目はやや鋭く，あごにくっきりと刳り(くり)の線をほどこし，上唇のつき出た表情など，重厚さと量塊(りょうかい)性に富んだ像である。裳には翻波(ほんぱ)式衣文(えもん)が残り，天衣には旋転(せんてん)文がうづまいて彫り出され，9世紀頃から流行した壇像の趣が濃く，黒ずんでいるがわずかに彩色のあとがうかがえる。頭上の化仏十個は後補であるが，そのうち七個は相当古いものである。貞観彫刻(9世紀ころ)。もと報恩寺観音堂に納められていた。		
国	重要文化財(彫刻)	木造聖観音立像(所在観音堂)	もくぞうしょうかんのんりゅうぞう	1躯	世羅郡世羅町字赤屋	昭19.9.5	檜材，寄木造	像高136cm	菩薩は如来の境地に達する前の段階にあるもので，具体的には，釈迦の出家する前の太子つまり王子の姿をかたどる。観音菩薩はその菩薩の代表的なもので，更にその中でも聖観音は観音の基本形とも言うべきものである。 十一面観音とともに今は廃寺となり，報恩寺仏像収蔵庫に安置されているこの聖観音立像は，檜材の寄木造で，容姿の優麗温雅な平安時代(794～1191)の作品である。		
国	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうぞう	1躯	尾道市梶山田甲	昭24.2.18	一木造，上下二段の背刳りがある，素木	像高190cm	平安時代(794～1191)の作。摩訶衍(まかえん)寺の本尊で，冠帯は欠いているが天冠台を彫り出し，彫眼の像は，条帛(じょうはく)をつけ腕釧(わんせん)を彫出してある。すこぶる重量感のある堂々とした像であるが，天衣や裳の彫は比較的浅い。背面の胸背部と腕部に内刳(うちぐり)があるが，その納入品についての寺伝はない。この像は，たびたび災禍にあったためか，彩色はほとんど剥落し，化仏，手足や天衣の先端は欠失し，現存のそれらは後補である。		

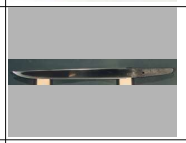
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（彫刻）	木造仏涅槃像	もくぞうぶつねはんぞう	1躯	尾道市御調町市	昭24.2.18	寄木造，漆箔，玉眼	像高150cm	鎌倉時代（1192～1332）の作。 涅槃とは，一切煩悩の繋縛を脱して迷界に再生する業因を滅却した境地と言われ，釈迦の死の時を言う。釈迦が沙羅双樹（さらそうじゅ）の下で右脇を下にして横臥し，その周囲をとりまいて，釈迦の弟子の僧達や俗人から鬼人，動物が悲嘆し慟哭している有様を描いた涅槃図は多いが，技術的にむつかしい彫刻は少ない。 本像は玉眼入り漆箔の等身大の数少ない涅槃像のひとつである。「寝釈迦」とも俗称されるこの像の現存する最古のものは，法隆寺五重塔の初重四面の塑像群で白鳳時代（8世紀），奈良明日香村の岡寺のものは天平時代（8世紀中葉），他には本像と同じ鎌倉時代のものが香川県の観音寺にある。		
国	重要文化財（彫刻）	木造阿弥陀如来坐像 像内に仁平四年造立の銘がある	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	広島市西区三滝町	昭33.2.8	檜材，寄木造，漆箔	像高85cm，膝張73cm	全体的に温和な風格が漂う定朝様の作風になり，像内の墨書銘で河内錦郡日野村（現在の大阪府河内長野市）の観音寺に，同寺の墮越である道俗男女が，平安時代，仁平4年（1154）11月に寄進したことが知られる。 容姿は肉髻は高く肉髻相は上部にあり，白毫は比較的小さく眉間の上方にある。衣文は前期に見られる翻波式は見られない。いわゆる来迎印を結んでいる。温和な風格が漂う平安彫刻の標準形である。肉髻を大きく作っているところは河内・和泉あたりの地方特色である。 ※定朝様（じょうちょうよう）…11世紀に仏師定朝が完成した様式。寄木造りの手法により胸を平かに，膝を広く低くし，顔は円満具足の相を持つ。 ※来迎印（らいごういん）…往生，臨終の際，極楽浄土から迎えにくる阿弥陀如来のとる印相 ※肉髻（にっけい）…頭部の肉が隆起する部分 ※白毫（びゃくごう）…眉間に生えた白い巻毛		
国	重要文化財（彫刻）	木造十一面観音立像（所在古保利薬師堂） 木造十一面観音立像3躯，木造先手観音立像1躯，木造吉祥天立像1躯，木造四天王立像4躯	もくぞうせんじゅかんのんりゅうぞう もくぞうきっしょうてんりゅうぞう もくぞうしてんのうりゅうぞう	9躯	山県郡北広島町有田	昭37.2.2	一木造	像高／千手観音像170cm，吉祥天163cm，四天王122cm	古保利薬師堂に伝えられた，平安時代（794～1191），貞観様式の仏像である。 千手観音像は千手と称するたくさんの脇手まで，胴体と共木から作り出されている点，わが国でも珍しく，面相麗しく，体躯は豊かに表現されている。 吉祥天像は，量感にとみ，その謹厳な姿や衣服などは神像を思わせる。 四天王像は足下に踏まえた邪鬼までが本体と共木で造られ，怒りをむき出した面相や動きのある姿態がすぐれている。 このような，いずれ劣らぬ一木彫りの貞観彫刻が一堂に残っているさまは壮観で，地方造像の注目すべき例として文化史的意義が高い。		関連施設：古保利薬師収蔵庫（0826-72-5040（千代田歴史民俗資料館））
国	重要文化財（彫刻）	木造阿弥陀如来坐像 像内に巧匠安阿弥陀仏，伊豆御山常行常御仏，建仁元年十月□日の銘がある	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭38.2.14	寄木造，漆箔，裳懸座にのる	像高74.0cm	漆箔で裳懸座（もかけざ）に坐るこの像は，銘文にあるようにもとは伊豆山権現（走湯山，神奈川県）常行堂の本尊であったもので，鎌倉時代，建仁元年（1201）快慶（安阿弥，あんなみ）の若い時代の作品である。形の整った安阿弥風のおだやかな作風のもので，宝冠をつけた，阿弥陀像としては珍しい形式の仏像である。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	重要文化財（彫刻）	木造獅子頭 下顎裏に正安三年九月彫刻の刻銘がある 附　木造獅子頭　1面	もくぞうししがしら	1面	世羅郡世羅町甲山 （大田庄歴史館寄託）	昭39.1.28	木造，漆塗及彩色	高さ25cm，長さ40cm	鎌倉時代の正安3年（1301）9月の作で，下顎裏に墨書銘がある。大型のもので，おだやかな刀法で作られており，黒漆塗に金や朱の彩色がよく残っている。鎌倉時代の獅子頭の代表的なものである。付（つけた）りの獅子頭は対をなすものであるが，時代は下る。 丹生（たんじょう）神社は今高野山の鎮守。		関連施設：大田庄歴史館（0847-22-4646）
国	重要文化財（彫刻）	木造観音菩薩立像 附　木造観音菩薩立像　1躯	もくぞうかんのんぼさつりゅうぞう	1躯	尾道市向東町	昭52.6.11	一木造	像高178.0cm	等身の一木彫像で，肩幅広く量感豊かな体躯や翻波（ほんぱ）風の衣文には平安時代初期（9世紀）の余風を伝えてはいるが，総体におだやかさが顕著になっており，10世紀の製作と考えられる。堂々とした風格があり，保存も比較的良く，備南地方の平安古像を代表するすぐれた作品である。 付（つけた）りの菩薩像は本品と一緒に伝世したものであるが，作柄に地方風が強く，この地方の造像傾向の変遷の一端をうかがう遺作として価値がある。11世紀の作と考えられる。		
国	重要文化財（彫刻）	木造不動明王坐像	もくぞうふどうみょうおうざぞう	1躯	廿日市市宮島町	平5.6.10	檜材，一木造，彩色	本体像高98.7cm，光背高157.0cm	弁髪を結い，両眼を開き，上歯牙を露わす大師様不動明王像の古例である。顔をわずかに右に向ける姿も，東寺講堂像（国宝）に似て古様であるが，整理された量感表現や装飾的な臂釧（ひせん）にみる浅い刻出などから平安時代，10世紀後半の作と推定される。もと京都仁和寺（にんなじ）塔頭（たっちゅう）真乗院に祀られていた。 光背（こうはい）の周縁火焔（かえん）は後補とみられるが，二重円相部に浮彫りされた宝相華（ほっそうげ）文は本体の臂釧の彫りと共通しており，本体と一具同作とみられる。		
国	重要文化財（彫刻）	木造行道面	もくぞうぎょうどうめん	11面	三原市八幡町宮内	平14.6.26	楠材，旧は彩色あり	獅子頭：高さ30.0cm 馬頭：長さ53.1cm 菩薩面：縦20.0～20.5cm，横21.0～22.0cm 比丘面：縦29.0cm，横21.0～22.0cm 如来面：縦33.5cm，横20.0cm	行道（練供養，ねりくよう）とは，仏像を奉じ行列を組んで練り歩くもので，この時に使用される面が行道面である。 13面のうち，獅子頭と馬頭（うまがしら）は平安時代後期（12世紀），菩薩面8面及び比丘（びく）面2面は鎌倉時代前期（13世紀），如来面は室町時代（1333～1572）の作である。獅子頭と馬頭は類例希な遺例で，菩薩面及び比丘面は慶派風の上質な作である。胡粉が残っており，旧は彩色が施されていた。菩薩面の一部の冠には金泥が残っている。 破損は著しいが平安時代後期の作である菩薩面3面が附指定となっている。		関連施設：御調八幡宮宝物収蔵庫（0848-65-8652）
国	重要文化財（彫刻）	木造僧形八幡神坐像 木造僧形神坐像 木造女神坐像 木造天部形立像	もくぞうそうぎょうはちまんしんざぞう，もくぞうそうぎょうしんざぞう，もくぞうにょしんざぞう，もくぞうてんふぎょうりゅうぞう	7躯	三原市八幡町宮内	平15.5.29			御調（みつき）八幡宮の本殿にまつられている神像である。製作時期は平安時代前期の9世紀から10世紀初めにかけてに求められ，八幡神が2神から3神へと変化していく歴史的経過を明瞭に示しながら，各時代の作がよく保存されている。仕上りの美しさや保存状態の良さもさることながら，神像の造形的変遷を如実に示す好個の作例である。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（彫刻）	木造神像　11軀 木造随身立像　4軀	もくぞうしんぞう もくぞうずいじんりゅうぞう	15軀	府中市元町 （府中市教育委員会　寄託）	平成29(2017)年9月15日		像高（神像）42.2～63.3cm（随身）100.3～138.5cm	備後国府跡の近くにある南宮神社の本殿に御神体として伝来した神像群と，同社の門に安置される，随身と称される左右一対の神像二組である。平安末期から鎌倉前期にかけての製作とみられる。男神4軀と女神3軀は同じ作者の手になるとみられるが，年齢や性格などを作り分けているのが注目される。近年の調査で見出された作例である。		
国	重要文化財（彫刻）	木造丹生明神坐像，木造高野明神坐像	もくぞうにうみょうじんざぞう　もくぞうこうやみょうじんざぞう	2軀	世羅郡世羅町甲山	平成30(2018)年10月31日		像高（丹生明神）62.1cm,（高野明神）61.2cm	高野山が備後国大田庄の経営拠点として設けた真言宗寺院，今高野山の鎮守社に伝わる一対の男女神像。平安風をとどめた作風より，大田庄の高野山寄進からさほど隔たらない鎌倉初期の製作とみられる。この時代の神像の優品である。		
国	重要文化財（工芸品）	銅製梵鐘（伝僧恵瓊将来）	どうせいぼんしょう	1口	広島市東区牛田新町三丁目	明32.8.1		高さ160cm，直径65cm	不動院鐘楼（重要文化財）にあるこの梵鐘は，毛利・豊臣両氏に信頼の厚かった安国寺恵瓊（あんこくじえけい）が，朝鮮半島から持ち帰ったと伝えられる高麗（こうらい）初期の名鐘である。蓮華文の撞座（つきざ）が4個鋳出される。撞座中央に菩薩坐像があり，「信相菩薩」の銘が刻まれている。鐘の身の上下両端に唐草文様が彫り出され，四面には天女が衣をなびかせながら雲上を舞う姿を刻んでおり，その文様はすぐれており美しい。 不動院は，中世，安芸安国寺として安芸の守護大名・武田氏の信仰を得ていた。火災などで一時は堂塔の大半が失われたが，安国寺恵瓊が再建に尽力し，現存する建物の多くが恵瓊によって建てられたと言われる。江戸時代に禅宗から真言宗に変わり，寺号も宥珍（ゆうちん）が不動明王を奉じてきたので不動院と呼ばれるようになった。 ※高麗…10世紀初めに興った朝鮮半島の国家。1392年滅亡。		
国	重要文化財（工芸品）	梅唐草蒔絵文台硯箱（伝大内義隆奉納）	うめからくさまきえふみだいすずりばこ	1組	廿日市市宮島町	明32.8.1		硯箱縦24.3cm，横22.8cm，深さ4.8cm。 文台高さ8.4cm，幅54.4cm，奥行54.2cm。	硯箱・文台・墨柄ともに黒漆塗で，梨地に濃淡をつけ淡い部分に薄肉高蒔絵の梅花を，濃い部分に同様の手法で梅唐草をあらわし，ところどころに金と錫の截金（きりがね）を点している。硯箱の内部も淡蒔絵に梅唐草をあらわす。蒔絵の意匠・技法からみて室町時代末期（16世紀）の作で，大内義隆献納という社伝も信じられる作品である。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	紺紙金泥法華経入蓮花蒔絵経函	こんしきんでいほけきょういりれんげまきえきょうばこ	1箇	廿日市市宮島町	明32.8.1		縦33cm，横16cm，高さ11.5cm	函は長方形印籠蓋（いんろうぶた）造りで，全面下地に布をはり，古様の大柄な蓮池の写生的文様が沃懸地（いかけじ）であらわし，流水などの一部に重ね蒔きされ，蓮茎には金銀截金（きんぎんさいきん），蓮花には錫などの新しい手法が見える。平安時代後期（11・12世紀）の作。光明皇后筆法華経入れである。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	藍韋肩赤威甲冑　大内義隆奉納	あいかわかたあかおどしかっちゅう	1領	廿日市市宮島町	明32.8.1		鎧高（胸板より草摺裾まで）59.5cm。 兜鉢高さ12.7cm，前後径23cm，左右径20.6cm。	この鎧の寄進状によると，戦国時代，天文11年（1542）5月20日に大内義隆が奉納したもので，奈良の甲冑（かっちゅう）師春田光信の銘がある。 鎧は黒漆塗鉄地盛り上げの鉄及び革の本小札（こざね）を一枚交ぜとして，前後の立挙は赤糸を，衝胴及び草摺（くさずり）は濃い藍皮で威（おど）している。兜鉢は鉄黒漆塗二方白六十四間総覆輪筋兜鉢（てつくろうるしにほうしろろくじゅうよんけんそうふくりんすじかぶとばち）で，腰巻際に威垣をつけた高勝山（たかかつやま）形である。室町時代末期（16世紀）という甲冑の転換期で，当世具足が出現する時期に製作されたこの鎧は，甲冑研究史上の好資料である。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	木地塗螺鈿飾太刀	きぢぬりらでんかざりたち	1口	廿日市市宮島町	明32.8.1	束は白鮫の皮を張り，鞘は朱檀地に黒漆塗	総長1.03m	儀杖（ぎじょう）用の太刀で，柄には白の鮫皮をはり，鞘（さや）は茶色がかった朱色木目地塗で，風風とりんどう唐草を表裏に巧みな構図で青貝螺鈿（あおがいらでん）にしている。鞘の足金物，責金，石突金物等は欠失している。鐔（つば）は唐鐔で，葛形の蔓金物をつけ鍍金（ときん）をほどこしている。この飾太刀の伝来及び奉納者はわからないが，平安時代後期（11・12世紀）の風趣豊かな作品である。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	鍍金兵庫鎖太刀	ときんひょうごぐさりたち	5口	廿日市市宮島町	明32.8.1		総長97.5cm	兵庫鎖太刀は，帯執（おびとり）が細い針金で作られた三筋か四筋の鎖でできているところにその名の言われがあり，平安時代末期から鎌倉時代（12～14世紀前半）にかけて武将の間で流行した。その造りがいかめしいところから厳物（いかもの）造太刀とも，鞘（さや）や柄の表裏に板金を着せ，上下から長い覆輪をかけるところから長覆輪太刀とも呼ばれる。 5口のうち1口は，鞘の板金に蓬莱（ほうらい）文と舞鶴図を毛彫りにし，帯執に三筋の鎖をつけた鎌倉時代中期（13世紀）の作で，13世紀後半の鎌倉将軍である久明親王か惟康親王かいずれかの奉納であるという。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	鍍金長覆輪太刀	ときんちょうふくりんたち	1口	廿日市市宮島町	明32.8.1		総長92.4cm	この太刀は，帯執（おびとり）を欠失しているのは惜しまれるが，「厳島図会」に他の兵庫鎖太刀と区別した書き方をしているところから見て，帯執はセッ金を用いた革足（かわあし）の太刀であったと思われる。拵（こしらえ）は簡素で，鞘の表裏板金に松喰鶴文（まつくいつるもん）を毛彫（けぼり）にし，その上下に鍍銀（とぎん）の長覆輪をかけている。柄も同様である。鎌倉将軍九条頼嗣（在任1244～1252）の寄進と伝えられる。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）

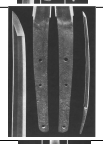
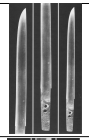
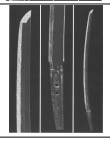
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（工芸品）	錦包藤巻太刀1，錦包藤巻腰刀1（刀身欠）	にしきつつみとうまきたち　にしきつつみとうまきこしがたな	2口	廿日市市宮島町	明32.8.1 昭27.3.29（追加指定）		太刀／総長102.6cm 腰刀／総長36.3cm	太刀は鐔（つば）を欠いているが優れた作品であり，腰刀の製作も同様で，鞘（さや）・柄ともに木地を赤地の綿で包み，藤で荒く菱巻にしたすこぶる簡素で雅趣に富むこしらえで，平安時代（794～1191年）ないし鎌倉時代初期（12世紀前半）の優秀な製作である。この時代の腰刀ごしらえで現存するものは稀であり，太刀と一対であることは一段と貴重である。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	紙本墨書扇（伝高倉天皇御物）	しほんぼくしょおうぎ	1柄	廿日市市宮島町	明32.8.1		長さ39cm	紙はり扇の最も古い形式を示すもので，黒漆塗の5本骨の夏扇で，その料紙の表は大小の金銀の切箔（きりはく），銀砂子（ぎんすなご）などを用いた華麗なものであるが，裏はほとんど銀砂子を散らしたのみで，表とはかわった趣を出している。表裏には仁平元年（1151）に撰（せん）された「詞花集」巻三の秋の部から抄出した三条院や花山院の和歌が散らし書きにしてある。また裏面右上端には金剛界大日如来の種字が記されている。書は久我通親，高倉天皇（1161～1181）の寄進と伝えている。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	木製彩色楽器　奚婁，兆鼓	もくせいさいしょくがっき　けいろう，ふりづつみ	2面	廿日市市宮島町	明32.8.1		奚婁(けいろう)径23.5cm，厚さ16.0cm，兆鼓(ふりつづみ)総高39.0cm	この楽器は両者とも舞楽「一曲」の舞人が用いる鼓の一種で，右手に撥（ばち）を持ってを奚婁（けいろう）打ち，左手に兆鼓（ふりづつみ）を鳴らすという風に，両者は一具として使用される。 奚婁は檜製漆塗の胴に極彩色で宝相華（ほうそうげ）文を描き，紐で首に下げ撥で打つ楽器である。 兆鼓は柄を回転させると糸の先の二個の小玉が鼓の支を打つように造られた楽器で，胴に黒漆をかけ，朱地に金泥で雲龍を描いている。 ともに鎌倉時代の嘉禎年間（1235～1238）の作と思われ，保存がよい。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	七絃琴（伝平重衡所用）	しちげんきん	1面	廿日市市宮島町	明32.8.1	全面漆塗	長さ121cm	表面は桐，底面は梓材を用い，全面漆塗で表面は丸味をつけ底面は平らにし，前方が広く後方は狭い。絃は生桑の繭糸を用い，前方の絃眼の下部に軫(しん)がついている。軫は玉や象牙製で，徽(き)(13個の小円)は螺鈿（らでん）である。七絃琴は，平安時代（794～1191）に盛行した楽器であるが，その完存品はほとんどなく，社伝に言う平安時代末期の武将・平重衡所用も時代的には信ずるに足りる作品である。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	木製銅字扁額（後奈良天皇宸翰）	もくせいどうじへんがく	2面	廿日市市宮島町	明32.8.1		（厳島大明神）縦254cm，横148cm，（伊都岐島大明神）縦252cm，横150cm	海上に立つ大鳥居の表裏に掲げられていたもので，一には「厳島大明神」，他には「伊都岐島大明神」とあり，いずれの文字も銅板を切り抜いて板面に釘づけしてある。扁額の外画は木彫で，その内側上下には唐草文様を，左右には上り龍・下り龍を銅板に彫りつけ文様としている。 戦国時代，天文17年（1548）に大内義隆が社殿を修造したおりの奉納と伝えられている。 現在は宝物館に収蔵されている。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	銅製五鈷鈴（伝僧空海将来）	どうせいごこれい	1口	尾道市西久保町	明32.8.1	銅製	高さ22cm，口径5.5cm	五鈷鈴は金剛鈴と総称されるものの一つで，密教修法の時，諸尊を驚覚歓喜させ，眠っている仏心を呼びさますために用いられる。本品は鈴身に仏像を鋳出した五鈷仏像鈴で，その仏像の種類によって梵天帝釈四天鈴（ぼんてんたいしゃくしてんれい）と称されるものである。把柄（つかえ）は蓮華をかたどり，五鈷は獅子の爪の形をした精巧な細工の逸品で，寺伝に弘法大師将来という晩唐期（9世紀頃）の作品である。		
国	重要文化財（工芸品）	銅鐘　峻豊四年ノ銘アリ	どうしょう	1口	竹原市竹原町上市	明43.4.20		高さ47cm，口径41cm	峻豊4年（963）高麗（こうらい）の光宗の時代に作られた朝鮮製の鐘である。小早川隆景が朝鮮侵略の際に持ち帰り，幼時の学問所であった照蓮寺に寄進したという。		
国	重要文化財（工芸品）	太刀　銘光忠 附　革柄蝋色鞘脇指拵　　※蝋は旧字	たち	1口	廿日市市宮島町	明44.4.17	刃文丁子	刃長51.6cm，反り1.8cm	刃文は丁字。光忠は鎌倉時代中期（13世紀ごろ）の名工で，長船派の租であり作風は豪放華麗である。この刀は光忠在銘の数少ない遺例であり，豊臣秀吉が用いていたものを毛利輝元が得て，神社に寄進したという。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	太刀 表ニ備州長船住（一字不明）長作 裏ニ嘉元二二年十月日ノ銘アリ （社伝則長作）	たち	1口	廿日市市宮島町	明44.4.17	鎬え板目，刃文直刃	刃長89.2cm，反り3.4cm	鎌倉時代，嘉元2年（1304）の作である。則長作と伝えられている。鎬えは板目，刃文は直刃である。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）

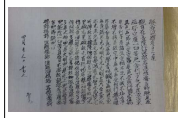
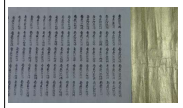
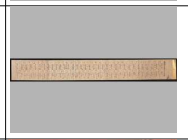
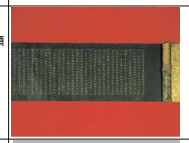
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（工芸品）	太刀　銘一 附　糸巻太刀拵	たち	1口	廿日市市宮島町	明44.4.17	刃文丁子	刃長86.5cm，反り0.3cm	刃文は丁字。鎌倉時代（1192～1332）に一派をなした備前一文字派の作である。拵（こしらえ）は安土桃山時代（1573～1602）以降大名の佩用（はいよう）とされた糸巻太刀である。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	錫杖	しゃくじょう	1柄	尾道市西久保町	明44.4.17	銅製	長さ79.6cm	錫杖は有声杖とも言われ，頭部の輪形に遊環（ゆうかん）を通し，これを揺って音を出すものである。錫杖の渡来は仏教初伝の頃と言われ，長さは等身丈で，字の如く杖として用いられていたが，後には柄を短くして手錫杖とよばれ，杖としてではなく法要の時の梵音具として用いられるようになった。この錫杖も「手錫杖」で，双竜の頭に蓮華をさした花瓶をおき，竜尾で錫杖の輪をかたどり，頂上に定印（じょういん）の三尊仏を配し，朱色の短い杖をつけた精巧な品である。寺伝では弘法大師将来という晩唐（9世紀ごろ）の作である。		
国	重要文化財（工芸品）	太刀 　中身久国ト銘アリ 附　糸巻太刀拵	たち	1口	廿日市市宮島町	明45.2.8	鍛え板目，刃文乱れ	刃長75.8cm，反り2.7cm	鍛え板目，刃文乱れ。鎌倉時代初期（12世紀末～13世紀前半）の粟田口（あわたぐち）派の最もすぐれた刀工であり，後鳥羽院の番鍛冶であった久国（ひさくに）の作である。豊臣秀吉の所用であったものを毛利輝元が得て，後に寄進したという。糸巻の太刀は安土桃山時代（1573～1602）以降用いられ，大名の儀杖と兵杖を兼用するものであった。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	革包太刀 　中身貞和二年云々ト アリ	かわつつみたち	1口	廿日市市宮島町	明45.2.8	刃文直刃	刃長91.2cm，反り3.3cm	南北朝時代，貞和2年（1346）の作である。拵（こしらえ）は鮫皮で包んである。刃文は直刃乱れである。備中国青江助次，助豪両名の合作刀で，戦国時代（16世紀）の厳島神社の社家・棚守房顕（たなもりふさあき）の奉納と伝えられる。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	太刀　銘包次 附　黒塗半太刀拵	たち	1口	廿日市市宮島町	大3.4.17	鍛え板目，刃文直刃	刃長70.8cm，反り2.8cm	鎬（しのぎ）造りで鎬の高い庵棟，鋩は板目に大板目交り地斑入り，刃文は小乱れに小丁字（こちょうじ）交り，大きな焼落しがある。腰反りの高く踏張った太刀姿である。 包次は鎌倉時代初期（13世紀前半）の備中青江派の刀工で，大きな焼落しと太刀銘ある作は少なく好資料である。戦国時代（16世紀）の武将・吉川元長の寄進と伝えられ，「新髭切（しんひげきり）」の号があるという。拵（こしらえ）は，室町時代（1333～1572）の半太刀拵の現存するものとして貴重である。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	刀　銘談議所西蓮 附　打刀拵	かたな	1口	廿日市市宮島町	大3.4.17	鍛え板目，刃文乱れ	刃長69.4cm，反り2.5cm	鎬（しのぎ）造，庵棟で鋩は板目，刃文は大きくのたれ交りに小乱れ交りの磨り上げながら，腰反りの形状を残している。 鎌倉時代末期（14世紀前半）の作である。西談義所西蓮は，筑前国の談議所（裁判所兼役場）に勤めた人で，名を国吉と言い鎌倉時代末期の刀工である。この刀は豊臣秀吉の愛刀であったものを，毛利輝元が得て当社に寄進したものである。拵（こしらえ）は黒漆鞘で天正拵と称される作品中の優品である。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	毛抜形太刀 　銘備州尾道五阿弥長行天文廿四年六月吉日 吉備津宮奉寄進御太刀（二字不明）次郎左工門尉忠吉拵付	けぬきがたたち	1口	福山市新市町宮内	大4.3.26	鎬造，庵棟，腰反り，鍛え板目，刃文直刃	刃長60.8cm，反り2.3cm	吉備津神社に伝わる四口の毛抜形太刀の一口。戦国時代の天文24年（1555）の作で，尾道の刀工五阿弥長行の作である。茎（なかご）に毛抜形の透しをする平安時代（794～1191）の同種太刀の模古作である。 鎬造（しのぎづくり），庵棟，腰反りで鍛えは板目，刃文は直（すぐ）刃である。		岡山県立博物館に寄託 関連施設：備後一宮吉備津神社宝物館（0847-51-3395）
国	重要文化財（工芸品）	毛抜形太刀 　銘備州尾道五阿弥長行天文廿四年六月吉日 吉備津宮奉寄進御太刀（以下不明）	けぬきがたたち	1口	福山市新市町宮内	大4.3.26	鎬造，庵棟，腰反り，鍛え板目，刃文直刃	刃長60.2cm，反り2.8cm	吉備津神社に伝わる四口の毛抜形太刀の一口。戦国時代の天文24年（1555）の作で，尾道の刀工五阿弥長行の作である。茎（なかご）に毛抜形の透しをする平安時代（794～1191）の同種太刀の模古作である。 鎬造（しのぎづくり），庵棟，腰反りで鍛えは板目，刃文は直（すぐ）刃である。		岡山県立博物館に寄託 関連施設：備後一宮吉備津神社宝物館（0847-51-3395）
国	重要文化財（工芸品）	毛抜形太刀　銘正光 　拵付（長さ61.6cm）	けぬきがたたち	1口	福山市新市町宮内	大4.3.26	鎬造，庵棟，腰反り，鍛え板目，刃文直刃	刃長61.6cm，反り2.5cm	吉備津神社に伝わる四口の毛抜形太刀の一口。戦国時代（16世紀）の作で，三原鍛冶のひとり・正光の作である。茎（なかご）に毛抜形の透しをする平安時代（794～1191）の同種太刀の模古作である。 鎬造（しのぎづくり），庵棟，腰反りで鍛えは板目，刃文は直（すぐ）刃である。		岡山県立博物館に寄託 関連施設：備後一宮吉備津神社宝物館（0847-51-3395）

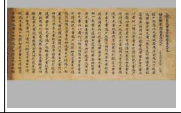
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（工芸品）	毛抜形太刀　銘正光 拵付（長さ61.5cm）	けぬきがたたち	1口	福山市新市町宮内	大4.3.26	鎬造，庵棟，腰反り，鍛え板目，刃文直刃	刃長61.5cm，反り2.3cm	吉備津神社に伝わる四口の毛抜形太刀の一口。三原鍛冶のひとり・正光の作で，茎（なかご）に毛抜形の透しをする平安時代（794～1191）の同種太刀の模古作である。 鎬造（しのぎづくり），庵棟，腰反りで鍛えは板目，刃文は直（すぐ）刃である。		岡山県立博物館に寄託 関連施設：備後一宮吉備津神社宝物館（0847-51-3395）
国	重要文化財（工芸品）	太刀　銘備州長船住（一字不明）真 附　革包太刀拵	たち	1口	廿日市市宮島町	大7.4.8	鍛え板目，刃文丁子	刃長105.4cm，反り5.4cm	鎬造（しのぎづくり），丸棟で鍛は板目，刃文は互の目に丁字交り足（あし）入り。表裏に棒樋（ぼうひ）を掻き，反り高く踏ばりのある太刀姿で，佩表（はいおもて）よりに長銘がある。社伝では国真と言うが，鎌倉時代末期（14世紀前半）から南北朝時代（1333～1392）にかけての元重一派，重真と見る説もある。拵（こしらえ）は，鞘を黒塗しぼ皮で包み，柄は黒漆鮫皮を藍革菱巻（あいかわひしまき）にしていたと思われるが，現在は破損している。室町時代（1333～1572）の作。毛利元就の兄である毛利興元の寄進と伝えられ，「稲光長太刀」と号すという。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	太刀　銘一 附　黒塗太刀拵	たち	1口	廿日市市宮島町	大8.4.12	刃文丁子	刃長73.6cm，反り2.8cm	鎬造（しのぎづくり），庵棟・鍛は板目肌つみ，刃文は丁字乱れに大丁字交り，腰反り高く踏んばりのある鎌倉時代中期（13世紀）の福岡一文字派の作である。福岡一文字派は，備前福岡を本拠に鎌倉時代初期（12世紀末～13世紀初め）の則宗以来繁栄した一門で，鎌倉期には多くの名工が出た。銘は個名か一の字を切るが，一般には一の銘を切るのが多い。本品は生ぶ茎である点が貴重で，毛利元就の所用と伝えられる。拵（こしらえ）は室町時代末期（16世紀ごろ）の作である。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	太刀　銘清綱 附　野太刀拵	たち	1口	廿日市市宮島町	大15.4.19	鍛え板目，刃文乱れ	刃長79.8cm，反り3cm	鎬造（しのぎづくり），庵棟で身幅広く，鍛は板目に大板目交り流れごころとなり，刃文は小乱れに互の目交りの腰反りが高く，踏ばりのある堂々とした太刀姿である。清綱は鎌倉時代中期（13世紀）から室町時代末期（16世紀）まで数代あるが，この作は鎌倉時代中期における清綱の代表作である。毛利元就の家臣で桂下総守元忠の寄進である。拵（こしらえ）は室町時代の作。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	太刀　銘備中国住（以下不明） 延文三年六月日	たち	1口	廿日市市宮島町	大15.4.19	鍛え板目，刃文直刃	刃長101.7cm，反り3.6cm	南北朝時代（1333～1392），延文3年（1358）に備中刀工の流派のひとつ・青江派の刀工が作ったもの。鎬造（しのぎづくり），丸棟で反りが比較的浅い大太刀である。鍛は小木目杢交りにところどころに鯰肌が交る。刃文は中直刃，表裏に棒樋（ぼうひ）を掻いている。佩表（はいおもて）棟寄りに細鏨（たがね）の長銘に年紀が刻まれている。個名の部分は朽ちて不明である。南北朝時代における青江派の作には比較的大太刀が現存するが，この太刀もその典型的なもので，地刃も健全である。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	刀　無銘伝雲次 附　革柄蝋色鞘打刀拵　※蝋は旧字	かたな	1口	廿日市市宮島町	昭2.4.25	鍛え板目，刃文直刃	刃長67.9cm，反り1.8cm	鍛は板目で刃文は直（すぐ）刃。すりあげの無銘であるが，社伝では鎌倉時代末期（14世紀前半）備前宇甘庄（うかいのしょう）の名工雲次作という。毛利輝元の家臣・佐世石見守元嘉が寄進したもの。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	短刀　銘長谷部国信 附　銀鮫柄蝋色刻鞘合口拵　※蝋は旧字	たんとう	1口	廿日市市宮島町	昭2.4.25	鍛え板目，刃文ひたつら，彫り物剣，梵字	刃長21.9cm，反り0.3cm	鍛は板目で刃文はひたつら。彫り物は剣と梵字。国信は南北朝時代（1333～1392）における京都の名工である。広島藩の厳島奉行・松田方好（まさよし）の寄進である。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	太刀　銘文永二年三月清綱 附　革包太刀拵	たち	1口	廿日市市宮島町	昭6.1.19	鍛え板目，刃文丁子	刃長79.8cm，反り3.7cm	鎌倉時代，文永2年（1265）周防二王派の刀工・清綱の作。鎬造（しのぎづくり），庵棟で鍛は小板目肌やや流れごころとなり，刃文は中直刃に小のたれ交りの，磨り上げではあるが，高く堂々とした太刀姿である。茎先に細鏨（たがね）で書き下し銘がある。 清綱は周防国二王派の刀工であるが，文永2年の紀年銘をもつ清綱は他に例がなく，紀年銘をもつ清綱として貴重である。拵（こしらえ）の柄は黒漆鮫皮で，鞘は黒漆のしぼ皮をかけた堅牢な南北朝時代から室町時代初期（14世紀）の作と思われる。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	唐花鴛鴦八稜鏡	とうかえんおうはちりょうきょう	1面	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭17.12.22		直径29.5cm	この鏡は，伊勢神宮の神官の系譜の家に伝承されたもので，花芯座とも言うべき座が紐の周囲にあり，内外区の界圏もあるが，内外の文様は同一系統であるので自由に連絡している。鴛鴦（雄雌のおしどり）と唐花は相対しており，その趣は優雅流麗で，鋳技（ちゅうぎ）も非常にすぐれており，保存も完好な鎌倉時代（1192～1332）における和鏡の逸品である。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）

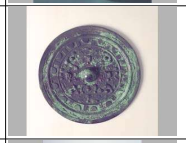
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（工芸品）	短刀　銘山城国西陣住人埋忠明寿 慶長十三年三月日	たんとう	1口	広島市中区上幟町	昭27.3.29			江戸時代，慶長13年（1608）製造の山城国（現，京都府）の刀匠・埋忠明寿（うめただみょうじゅ）の作である。彼の作品には短刀が多く,刀身に龍の彫刻を施したものが多い。 この短刀に彫りこまれた玉追いの龍の顔は,下あごが大きく角張った受け口で,明寿の特色をよく表している。		
国	重要文化財（工芸品）	鋳銅釣燈籠 厳島大明神宮燈爐一口筑前国博多講衆等正平廿一年三月三日在銘	ちゅうどうつりどうろう	1基	廿日市市宮島町	昭29.3.20		高さ28cm，重さ8.4kg	銅の鋳物であるこの釣燈籠は，連子窓（れんじまど）を鋳透（いすか）した筒形の火袋の上に，煙出しの孔を半月形に透した花弁形の笠をつけたもので，台の縁は六角形，台下に三足を鋳出し台底に一文字湯口を残している。笠には一面に刻銘がある。南北朝時代の正平21年（1366）に博多商人左近等が厳島神社に奉納したものである。釣燈籠のうち最古の紀年銘があるもので，銘文から考えて，筑前戸屋の鋳物師（いもじ）の作と考えられる。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	短刀　銘國廣（号堀川國廣）	たんとう	1口	広島市中区上幟町	昭30.2.2			安土桃山時代（1573～1602）の刀匠,堀川國廣（ほりかわくにひろ）作の短刀。堀川國廣は,日本各地を遍歴して作刀した後，慶長年間（1596～1615）の初めから京都一条堀川に住み,多数の門人を抱えて何人もの名工を育てた。その豪放な作風で名声を得，慶長19年（1615）死亡したと伝えられる。 この短刀には年紀がないが,作風から見て,彼の円熟期にあたる慶長7～8年（1603・1604）頃のものと考えられている。		
国	重要文化財（工芸品）	孔雀倉戈金経箱 蓋裏に「延祐二年棟梁禅正明慶寺前宋家造」外底に「延文三年六月日」の銘がある	くじゃくそうきんきょうばこ	1合	尾道市東久保町	昭30.2.2		縦40cm，横22cm，高さ25cm	中国南部の杭州で，元の延祐2年（1315）に製作された箱である。その後，日本に輸入され，南北朝時代の延文3年（1358）には浄土寺で最勝王経の箱とされた。 内部に朱漆，外面に黒漆をほどこし，孔雀文が彫られている。蓋に「首」，身に「性」の文字が彫られ，蓋裏に「延祐二年云々」の黒漆銘，外底に「備後国尾道云々」の朱漆銘がある。 元からの舶来品で，製作年代，製作地，製作者が明らかな中国漆芸史上の貴重な遺品で，製作年の明記された[84a1]金（日本では沈金と呼ばれる技術）作品としては最古のものである。 光明坊（豊田郡瀬戸田町）のものと姉妹品で，大きさ及び銘文はほとんど同じである。また，浄土寺の孔雀文沈金経箱とは大きさは違うが，意匠などはほとんど同一である。		奈良国立博物館に寄託 関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
国	重要文化財（工芸品）	孔雀倉戈金経箱 蓋裏に「延祐二年棟梁禅正杭州油局橋金家造」内底に「延祐二年棟梁禅正」の銘がある	くじゃくそうきんきょうばこ	1合	尾道市瀬戸田町御寺	昭30.2.2		高25.2cm，縦39.8cm，横22.3cm	浄土寺（尾道市）旧蔵のもので，浄土寺にある「孔雀文沈金経箱」（重文）「孔雀[84a1]金経箱」（重文）の二合とは姉妹品で，特に後者とは大きさ及び銘文はほとんど同じである。 黒漆塗の面に孔雀と宝相華（ほうそうげ）の文様をきわめて精緻に[84a1]金彫りした精巧な舶載の工芸品で，刀技は単純鋭利，形態は素雅な元時代（1271～1368）の漆工の名品である。延祐2年（1315）銘がある。		東京国立博物館に寄託
国	重要文化財（工芸品）	漆絵大小拵（陣刀） （小柄前欠）	うるしえだいしょうこしらえ	1腰	廿日市市宮島町	昭30.6.22		（大）総長134.9cm，柄長49.1cm，鞘長101.2cm。（小）鞘長84.0cm。	安土桃山時代（1572～1603）の作で，毛利輝元奉納と伝えられる拵（こしらえ）一腰である。鞘は金箔をおき，その上に黒漆で這龍（げんりゅう）を描き，透き漆をかけて白檀塗（びゃくだんぬり）としたもので，その形は尻鞘をかけたような尻張りの長大華麗な拵である。「常山紀談」で，豊臣秀吉が輝元の刀を評して「異風を好む」と言っているのに合致して興味がある作品である。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	大太刀　銘備後国住人行吉作	おおだち	1口	廿日市市宮島町	昭30.6.22	刃文細直刃小乱れ交じり	刃長1.41m，反り6.9cm，重量4kg	南北朝時代（1333～1392）の作。鎬造（しのぎづくり），庵棟で身幅広く，長大豪壮な大太刀である。鍛は小板目肌よくつみ，刃文は細直刃小乱れ交りで，表裏に力強く棒樋を掻いている。このような大太刀は，南北朝時代に盛行したものであるが，本品は延文，貞治の頃（1356～68）の三原派の刀工行吉が造った野太刀で，古三原派の作としては典型的かつ最高の作品である。しかもまったくの打ちおろしで健全無比のものである。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	銅水瓶	どうすいびょう	1口	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭34.6.27		高さ27.5cm，胴径13.7cm。	水瓶は，もともとは僧侶が仏道修行に必要とする用具の一つであったが，供養具として仏前の献水に用いられるようになったものである。 この水瓶は，獅子のつまみのある蓋がついた鎌倉時代（1192～1332）の作で，志貴山形水瓶と呼ばれる形のものである。やや太首で，肩に水平の面取りを作り，長い注口と把手をつけるという形をしている。この形態の水瓶は法会の時の湯（とう）瓶に用いられることもある。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	重要文化財（工芸品）	金銅五鈷鈴 附　金銅五鈷杵　1口 金銅金剛盤　1面	こんどうごこれい	1口	尾道市西久保町	昭36.2.17	金銅製，鋳造品	五鈷鈴／高さ21.5cm，口径8.8cm 五鈷杵／長さ19.6cm 金剛盤／長径26.1cm	この五鈷鈴は，中帯に輪宝文を，肩帯に独鈷，口帯に三鈷を鋳出している珍しい作で，精緻な細工を施した形姿の美しい鈴である。五鈷杵・金剛盤とともに一具として伝存する鎌倉時代初期（12世紀末～13世紀初め）の製作である。寺伝によると，この一具は白河法皇から西国寺中興の僧慶ぱんに下賜されたものという。		

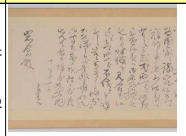
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（工芸品）	舞楽装束（納曽利） 「天正十七年正月吉日」の朱書銘がある	ぶがくしょうぞく（なそり）	1領	廿日市市宮島町	昭38.7.1	織り地は薄藍色の綾	丈137cm，裄88cm。	舞楽には，左の舞（唐楽系）と右の舞（高麗楽系）があるが，納曽利（なそり）は右の舞であり，本品はその童舞用の装束である。裏地の朱書銘により大壇那毛利輝元や家臣の児玉美濃守等4名が天正17年（1589）に奉納したもので，右の舞師田景欽が所用したものと思われる。織地は薄藍色の綾で，紺色の松皮菱襷き（まつかわびしつなき）を全面に施している。両袖の前後と左の前身ごろの下部に，丸に抱名荷（かかえみょうが）や亀甲花菱，あるいは下り藤紋を入れたものを色糸で刺繍している。類例の少ない安土桃山時代（1573～1602）の染色品として珍重される。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	狂言装束（唐人用） 　繍箔鳳凰鴛鴦菊文　1領 　繍箔鳳凰柳桜文　1領 　繍箔楓菊桐杜若文　1領 　繍箔柳樹鷺文　1領	きょうげんしょうぞく	4領	廿日市市宮島町	昭38.7.1	狂言装束	（鳳凰鴛鴦菊）丈64cm，裄63cm。（鳳凰柳桜）丈74cm，裄71.3cm。（楓菊桐杜若）丈72.3cm，裄65cm。（柳樹鷺）丈93.5cm，裄75.8cm。	狂言の中で今日あまり上演されることのない「唐人相撲」という狂言の装束で，袖の長いシャツの形で前をあわせてボタンでとめるというこの装束が揃っているのは稀である。本品も全部揃っていないが，4領のうち2領は数種類の，他は1種類の繍箔（ぬいはく）を仕立て直したもので，安土桃山時代（1573～1602）の染色刺繍を知る資料となる。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	孔雀文沈金経箱	くじゃくもんちんきんきょうばこ	1合	尾道市東久保町	昭44.6.20		縦54cm，横36cm，高さ29cm	尾道浄土寺に伝わる元の時代（1271～1368）の作品で，延祐2年（1315）銘の浄土寺所有孔雀[84a1]金（くじゃくそうきん）経箱や光明坊所有孔雀[84a1]金経箱と意匠がほとんど同じことから，同時代に製作されたと思われる。 　印籠蓋造りで，蓋表には黒漆塗を施し，身の長側面に双孔雀，短側面には双尾長鳥文，蓋の側面には唐花文をそれぞれ沈金で埋めつくして，蓋の正面に「天」，身の四隅に「性・静・情・逸」の文字を薬研彫にしている。蓋と身の内部は朱漆である。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
国	重要文化財（工芸品）	赤糸威鎧（兜・大袖付）	あかいとおどしよろい	1領	庄原市山内町	昭45.5.25	黒漆塗本小札・威毛緋糸・立挙前二段・後三段・長側四段・草摺脇楯とも四間五段・金具廻韋所獅子牡丹文染韋包・脇楯壷板・大袖七段・弄金物付・兜鉄阿古陀形黒漆塗四十六枚張四十二間筋鉢・[849f]五段・鍬形・吉字透前立・栴檀板付・鳩尾板欠	胴高33.5cm，胴廻87cm，大袖高47.5cm，大袖巾35cm，兜鉢高12.5cm，兜鉢《けい01》22cm	日吉神社は，鎌倉時代（1192～1332）に関東から地頭として西遷し土着した山内氏の崇敬が深く，この鎧は永禄元年（1558）に甲山城主山内首藤隆通が奉納したと言われる。脇楯を付け四間の草摺（くさずり）を垂れた鎧で，小札頭（こふだがしら）が尖（とが）りごころで胴は下窄り，阿古陀形（あこだがた）の筋兜などから見て室町時代（1333～1572）における末期式正鎧の特色が強い。鳩尾板を欠失するが，当初の状態を保って伝存することは珍しく貴重で，かつ製作精緻で技巧も優れている。		
国	重要文化財（工芸品）	能装束 　紅地鳳凰桜雪持笹文唐織	のうしょうぞく	1領	廿日市市宮島町	昭45.5.25	唐織	身丈138cm，裄65.5cm	紅綾地に鳳凰・桜・雪持笹文を横には反覆した形で，縦には打ち返しの形でならべられ，それが色がわりに織り出されているという唐織としては素朴な形をとったものである。袖先の増幅及びその文様などは江戸時代に盛行する能装束の先駆をなすと見られ，同社に伝来する能装束で，安土桃山時代（1573～1602）の唐織としては特色の強いものである。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	赤糸威胴丸具足（筋兜・小具足付）	あかいとおどしどうまるぐそく	1領	廿日市市宮島町	昭52.6.11		胴回り105.5cm，兜高20.0cm	南北朝時代から室町時代（1333～1572）にかけて盛行した胴丸形を受け継いだ具足で，立挙は前三段，後四段，衝胴は五段となり，兜は当世具足風の変わり兜の椎実形で切付札を用いるなど，当時流行の当世具足の特徴が見られる。全体を赤糸で威（おど）した綺麗なもので，製作もすぐれており，保存も良好である。毛利輝元所用と伝えられる。安士桃山時代（1573～1602）の作。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	梵鐘	ぼんしょう	1口	廿日市市宮島町	昭52.6.11	銅製	総高122.0cm，口径69.0cm	宮島彌山の山頂にあり，撞座及びその位置，龍頭の製作や形式は平安時代（794～1191）の特色をよく示している。平安時代の治承元年（1177）に平宗盛が奉納した旨の後刻銘がある。		
国	重要文化財（工芸品）	銀小札白糸威胴丸具足（兜・大袖・小具足付）附鎧櫃　1背	ぎんこざねしらいとおどしどうまるぐそく	1領	廿日市市宮島町	昭60.6.6		胴高36.9cm　兜高34.8cm	厳島神社に伝わる安土桃山時代（1573～1602）の具足。社伝では，毛利元就が奉納したものと言われている。 兜は烏帽子（えぼし）形に作り，その上から銀箔を押し広狭二筋（こうさふたすじ）を黒漆で描き，頭部を護る[849f]（しころ）には孔雀の羽毛を縫いつけた独特のものである。胴は右脇で引合わせて伝統的な胴丸（どうまる）形式によって作られているが，銀箔押の小札（こざね）や正面胸板には銀梨子地（ぎんなしじ）に菊・桐文を金蒔絵で散らすなど，細部には桃山時代の特色がうかがわれる。威毛（おどしげ）は白糸威であるが，生ぶ糸でまだ鮮やかな色調を留め，草摺（くさずり）と大袖の耳糸のみ萌葱（もえぎ）で威し，これが何となく全体を引き締った感じにしている。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	色絵花弁文輪花鉢　伊万里	いろえかきもんりんかはち　いまり	1口	広島市中区上幟町	平4.6.22	色絵磁器	高11.5cm，口径24.3cm，高台径10.3cm	江戸時代初期，1680年代製作と推定されている色絵の磁器。ドイツのザクセン選帝候・アウグスト1世（1670～1733）の収蔵品のひとつであった。日本最大の色絵磁器生産地・佐賀県有田地方で製作され輸出されたもので，特に輸出用最高級色絵磁器として発展した柿右衛門（かきえもん）様式の作品である。型づくりによる端正な形と洗練された雰囲気をもち，柿右衛門様式として技術的・様式的に最も完成されたものである。		関連施設：広島県立美術館（082-221-6246）

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（工芸品）	能装束 紅浅葱菊笹大内菱文様段替唐織	のうしょうぞく べにあさぎじきくささおおうちびしもんようだんがわりからおり	1領	廿日市市宮島町	平18.6.9	唐織	身丈131.5cm，裄66.5cm	表は唐織地，裏は紅平絹（ひらぎぬ）（後補）の袷（あわせ）仕立てである。全体は，紅地に菊・笹・花菱（はなびし亀甲きっこう）の文様を，浅葱（あさぎ）地に大内菱文様を表し，それらを互い違いに配した段替（だんがわり）の唐織である。袖の部分は，江戸時代に両袖の一部に裂（きれ）を継ぎ足して袖幅を出し，文様を補っているが，当初は身幅に対して袖幅が狭い桃山時代に通例の形態であったことがうかがわれる。全体に紅を基調とし，文様を表す絵緯（えぬき）は多彩で柔らかみがある。保存状態も良好であり，遺例が極めて少ない桃山時代の能装束唐織の優品として貴重である。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（工芸品）	三十二間二方白星兜鉢	さんじゅうにけんにほうしろほしかぶとはち	1頭	呉市広大新開　呉港高校	昭34.6.27		鉢の深さ11.5cm 前後径22.5cm 左右径21.1cm 頂辺穴径3.3cm	兜鉢は，鉄製三十二枚張二方白星兜で大円山形である。 前後の真中には金銅の地板を敷き，前5条，後2条の篠垂を用いているが，前面両端の篠垂は花先型を二分した片花先型で，篠垂は菊弁刻座，小刻座に縁取りした篠を重ね，中央と片花先型には12点，その左右には11点，後正中は12点の金銅の星を打っている。 地星は鉄一行13点で，腰巻に1点打っている。頂辺の穴は大きく，金銅製の装飾金具をつけている。 本品は眉庇（まびさし）と●（革へんに毎，しころ）を欠失しているものの，全体の形，保存の良好な鎌倉時代末期の貴重な星兜鉢である。		連絡先：呉武田学園法人事務局（0823-73-4656）
国	重要文化財（工芸品）	色々威腹巻 附　総覆輪筋兜鉢　1頭，黒韋威大袖　1双	いろいろおどしはらまき	1領	呉市広大新開　呉港高校	昭40.3.29		胴高28cm 草摺高28cm	この腹巻は，胴前立挙2段，後立挙2段で，長側は4段の裾搾りである。 草摺は七間五段下がりで，下にゆくほど撓を大きくしている。 威毛は上から紫・緋・白で，以下黒韋で威され，耳糸は亀甲，畔は啄木，菱縫は茜糸である。胸板・脇盾・押付は藻獅子の絵韋に小桜鋲が打たれ，金具廻りには金銅覆輪と出八双枝菊透し金物を用いている。 兜・大袖を具した室町時代末期の作である。		連絡先：呉武田学園法人事務局（0823-73-4656）
国	重要文化財（工芸品）	太刀　銘國清	たち〈めいくにきよ〉	1口	福山市西町二丁目　ふくやま美術館	昭和25年(1950)8月29日			鎌倉時代（13世紀）の作品。 京粟田口に鍛冶が早い時期から存在したのは『宇治拾遺物語』に「あはたの鍛冶」とあることからも推測できる。鎌倉初期に名工六兄弟を輩出したと伝える。 国清は六兄弟の四男というが，現在作品はごく少なく，作風はほかの粟田口鍛冶に相通じるものである。この作は古雅な健全な作で，ほとんど生ぶ茎で雉子股となるが僅かに伏せている。江戸時代には秋田佐竹家に伝来した。五代将軍徳川綱吉から天和元年（1681）に三代佐竹義処（よしずみ）が賜ったものである。 〈写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』〔ふくやま美術館編，平成20年〕から引用〉		関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345）
国	重要文化財（工芸品）	太刀　銘備前國長船兼光　延文三年二月日	たち〈めいびしゅうおさふねかねみつ／えんぶんさんねんにがつひ〉	1口	福山市西町二丁目　ふくやま美術館	昭和27年(1952)7月19日		身長88.8　反り2.3　元幅3.6 先幅2.5　鋒長5.6　茎長26.0 （cm）	南北朝時代・延文3年（1358）の作品。 備前兼光は長船鍛冶の正嫡系で南北朝時代に活躍している。作風は動乱の影響を受け，父景光風のものから沸（にえ）づいた弯（のた）れ刃のものへと大きく変化している。 この作は延文三年の年紀があり，時代の様相をよく示した，身幅が広く寸法の長い大太刀である。刃文は沸づいた直刃（すぐは）で地沸がよくつく。 上杉謙信，景勝ともに長寸の太刀を好んだと伝えるように，同家伝来の特色ある一口で，中ほどに刃こぼれがあり戦場での働きを窺わせる。 〈写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』〔ふくやま美術館編，平成20年〕から引用〉		関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345）
国	重要文化財（工芸品）	短刀　銘光包	たんとう〈めいみつかね〉	1口	福山市西町二丁目　ふくやま美術館	昭和28年(1953)11月14日			鎌倉時代（13～14世紀）の作品。 光包という刀工は京来派の国俊の弟子という。しかし，作品に「来」を冠したものはなく，一説に備前長光の弟子ともいわれる。 作風は，地鉄（じがね）のよくつんで冴えた来国俊に近いものとなり，小沸（こにえ）のよくついた直刃（すぐは）を焼く。この作は奥州仙台伊達家に伝来したもので，本作と越前松平家に伝来（現東京国立博物館蔵）したものが双璧である。ほかに名物「乱光包」があり，こちらは備前景光風の片落互の目刃を焼いている。 〈写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』〔ふくやま美術館編，平成20年〕から引用〉		関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345）
国	重要文化財（工芸品）	太刀　銘備前國長船盛景	たち〈めいびぜんおさふねもりかげ〉	1口	福山市西町二丁目　ふくやま美術館	昭和28年(1953)11月14日			南北朝時代（14世紀）の作品。 盛景は備前長船鍛冶であるが，古来「大宮備前」を呼称され，京大宮から備前へ移住した一派の刀工と伝えられた。しかし国俊を祖とする大宮物の系譜と盛景は合致せず，現在では真長－近景－義景－盛景と繋がる長船傍系鍛冶とみられている。 盛景は延文（1356～）から明徳（1390～）まで活躍しているが，この作は地刃ともに同工の特色を顕著にした典型作であり，かつ健全である。 〈写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』〔ふくやま美術館編，平成20年〕から引用〉		関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345）
国	重要文化財（工芸品）	短刀　朱銘貞宗（名物朱判貞宗）　本阿（花押）	たんとう〈しゅめいさだむね（めいぶつしゅばんさだむね）／ほんあ（かおう）〉	1口	福山市西町二丁目　ふくやま美術館	昭和29年(1954)3月20日			南北朝時代（14世紀）の作品。 相州貞宗は彦四郎と称し，五郎入道正宗の実子とも養子とも伝え，作風は正宗に近似するが有銘の作は存在しない，一説に江州高木の出身で，佐々木源氏の一族ともいう。 この享保名物「朱判貞宗」の名は，本阿弥光室の朱判があることから名付くという。地沸（じにえ）のついた鍛えと沸の深い弯（のた）れ調の乱刃は同工作の中でも抜群の出来である。帽子刃が常と異なり丸く返るが，地刃の出来の見事さを評価して貞宗以外には極められないものであろう。 名物帳には本阿弥光刹が所持し，土井大炊頭に移り，徳川秀忠から前田利常が下賜されたとあり，代八千貫という。 〈写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』〔ふくやま美術館編，平成20年〕から引用〉		関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345）
国	重要文化財（工芸品）	刀　無銘伝来國光	かたな〈むめいでんらいくにみつ〉	1口	福山市西町二丁目　ふくやま美術館	昭和31年(1956)6月28日			鎌倉時代（13～14世紀）の作品。 京の「来」鍛冶は諸書には国頼なる者を始祖と記しているが，実質的にはその子と伝える国行が祖であろう。国俊，国光，国次と続くが，国光・国次の後は南北朝の禍乱のため，来派は急速に衰退してしまう。来国光は伝統的直刃の作に加えて，相州伝の影響によるものか乱刃のものとがある。この作は前者の作風で，沸（にえ）が細かくよくついた同工の特色をよく表している。鞘書には「代金七拾枚折紙有」を記されており，かなり評価の高かったものであることが分かる 〈写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』〔ふくやま美術館編，平成20年〕から引用〉		関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345）

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（典籍）	紙本墨書後樫町天皇宸翰心経百九巻（自明和八年／至文化九年）	ごさくらまちてんのうしんかんしんぎょうひゃくきゅうかん	1巻		昭10.4.30	紙本墨書		江戸時代の女性天皇である後桜町天皇（1740～1813，在位1762～70）によって，上皇時代の明和8年（1771）から文化9年（1812）にかけて書写された般若心経109巻からなる。毎巻末に，書写の年号とともに，「智子　上」とある。 後桜町天皇は，名を智子（としこ）といい，文筆や歌道に優れ，宸記（日記）・宸翰・和歌などが数多く伝世している。この宸翰は，天明の大火（1788）で後桜町上皇の仮の御所となった青蓮院に伝来した。		
国	重要文化財（典籍）	紙本墨書後樫町天皇宸翰六字名号（自明和八年／至天明七年）	ごさくらまちてんのうしんかんろくじみょうごう	1巻		昭10.4.30	紙本墨書	縦31.5cm，横257cm	江戸時代の女性天皇である後桜町天皇（1740～1813，在位1762～70）によって，上皇時代の明和8年（1771）から天明7年（1787）にかけて書写された一行五段書きの「南無阿弥陀佛」の六字名号である。奥書には，「今の世にあらはとさらにしたふかよ　めぐみの露のかすかすにして　明和八年四月廿三日　智子　上」とあるなど，書写の年号，「智子　上」の記載のほか，ところどころに和歌が詠まれている。 後桜町天皇は，名を智子（としこ）といい，文筆や歌道に優れ，宸記（日記）・宸翰・和歌などが数多く伝世している。この宸翰は，天明の大火（1788）で後桜町上皇の仮の御所となった青蓮院に伝来した。		
国	重要文化財（典籍）	紙本墨書御判物帖	しほんぼくしょごはんもつちょう	2帖	廿日市市宮島町	明32.8.1		長さ510cm，縦25.3cm	平安時代の天喜元年（1053）以降，安土桃山時代の天正15年（1587）までに厳島神社宛に発給された古文書群の一部。特に貴重とみられた各時期の支配権力者の証文（判物）類を中心に70通の文書を2冊の折帖に集録する。年代順に第一帖に36通，第二帖に34通を収める。ほとんど原文書だが，7通は同時代をあまりへだてぬ時期の写しである。 平安時代の高田郡司藤原氏が，郡司職相伝の由緒によって高田郡七郷を私領化し，ついに厳島社領として寄進したことを示す一群の文書は，当時の土地支配の推移を知るうえで貴重である。鎌倉時代の貞応2年（1223）の厳島神社再建にかかわるもので，鎌倉将軍家の奉献と神社から将軍家への巻数進上に関するものも注目される。南北朝時代（14世紀）以降のものは足利尊氏，大内義隆等の造営領・社領の寄進状が中心であるが，社領相論に関する室町幕府の裁許状も含まれている。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（典籍）	紙本墨書観世音法楽和歌 建武三年五月五日尊氏証判アリ	しほんぼくしょかんぜおんほうらくわか	1巻	尾道市東久保町	明37.8.29	宝相華文紺表紙，紺紙金泥		足利尊氏は建武政府に反して間もなく九州に敗走したが，その途中浄土寺に船を寄せて本尊の観世音菩薩に戦運挽回の祈願をしている。その後数ヵ月で勢を回復した足利尊氏が上洛の途中の建武3年（1336）5月5日，再び浄土寺観音堂に参籠した時，尊氏と弟の直義等6人が本尊十一面観音菩薩の前で，観音賛仰の和歌33首を詠じて宝前に供えたものである。この中に尊氏の詠歌は7首で，巻頭の花押は尊氏の証判である。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
国	重要文化財（典籍）	紺紙金泥宝篋印陀羅尼経 道喜ノ序アリ	こんしきんでいほうきょういんだらにきょう	1巻	広島市西区己斐西町	明43.4.20	八曲屏風裏書		平安時代・康保2年（965）に僧道喜が伊豆の寺においてこの経を感得し，自ら紺紙に金泥で書写した経。その後，現在の佐伯区内の寺院に伝わった後，西福院七世増真上人（江戸時代，17～18世紀初頭の人）によって西福院にもたらされたという。1行17文字で，界線・文字ともに金泥で描かれ，美術的にも優れた装飾経である。巻首五十字を欠くが，書写の由来を記した宝篋印経記が巻頭にあり，貴重である。 ※宝篋印陀羅尼経…これを書写し読誦（どくしょう）するか，あるいはこの経巻を納めた宝篋印塔を礼拝すれば，罪障は消滅し，三途の苦は免れ，寿命長遠であるなど無量の功徳を説いた経。 ※金泥（きんでい）…金粉をにかわで溶かした顔料		
国	重要文化財（典籍）	紺紙金泥金剛寿命陀羅尼経 平親宗筆	こんしきんでいこんごうじゅみょうだらにきょう	1幅	廿日市市宮島町	明43.4.20	紙本墨書	縦33.2cm，横918cm	平安時代の治承2年（1178）4月24日に，平親宗が厳島詣の船中で写経した旨が奥書に記されている。親宗は，平清盛の妻時子及び建春門院滋子と兄弟である。 経巻は，金銀泥宝相華唐草文の表紙に，見返し絵は山水と弥陀説法の図が描かれている。文字はすこぶる達筆であるが，装丁などに破損・欠損がある。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（典籍）	紙本墨書尊海渡海日記（八曲屏裏書） 表二紙本墨画山水図アリ	しほんぼくしょそんかいとかいにっき	1隻	廿日市市宮島町	明43.4.20			戦国時代の天文6～8年（1537～1539）大内義隆の斡旋により，大願寺の尊海が高麗（こうらい）版大蔵経（だいぞうきょう）を輸入するために朝鮮半島へ渡った際の記録。かの地で求めた高麗の八曲屏風の裏に，李朝朝鮮の役人たちとの交渉を中心に見聞を書きつけたものである。記録史料とし貴重であるとともに，表の湘潭（しょうしょう）八景の墨画も，李朝朝鮮時代初期（15世紀）の朝鮮絵画の基準作例として貴重である。 大願寺は厳島神社の西南にある。厳島神社社殿の造営修理に係わっていた。		東京国立博物館で保管
国	重要文化財（典籍）	紙本墨書定証起請文 嘉元四年トアリ 附　同案文（残簡）1通	しほんぼくしょじょうしょうきしょうもん	1巻	尾道市東久保町	明43.4.20	巻初は金字銀字の交書，紺紙金銀泥	縦27.5cm，横671cm	鎌倉時代の嘉元4年（1306），真言律宗の西大寺叡尊（1201～1290）の弟子定証が浄土寺の伽藍を再建した時の自筆起請文である。 定証以前の浄土寺は紀州高野山に所属し，尾道の人光阿弥陀仏の外護によって本堂・五重塔・多宝塔・地蔵堂，鐘楼などが建てられていたが，専属の僧侶もおらず閑寂としていた。浄土寺が定証に寄進されると彼の勧進によって更に金堂・食堂・僧房・厨舎が造営され，広範な地域の人々の信仰を集める活気のある寺となったことが記されている。 文書は更に続き，嘉元元年（1303）の舎堂落成のほか，嘉元4年に行われた盛大な落慶供養の次第も詳細に記され，その文書中に見える定証の朱色の手印があざやかである。当時の盛観を知る資料である。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
国	重要文化財（典籍）	紙本墨書浄土寺文書 寺領注文建武四年十月日トアリ1通，尊氏寄進状外9通	しほんぼくしょじょうどじもんじょ	1幅	尾道市東久保町	明43.4.20	紙本墨書	縦27.6cm，横1180cm	浄土寺に所蔵されている中世文書115通のうちの11通である。浄土寺領因島地頭方年貢注文や足利尊氏寄進状，足利義教御判御教書など，南北朝時代（14世紀）から室町時代前期（15世紀前半）の古文書の一部である。 年貢注文は，浄土寺領因島（因島市）にある中庄・重井庄・三津庄地頭方の建武4年（1337）の年貢数量の注進状で，文中の年貢の中に千六百六十五俵三斗五升六合（八百三十二石八斗六升五合）にのぼる多量の塩がみられる点が注目される。尊氏寄進状は浄土寺におかれた備後国利生塔に対し，備後得良郷（賀茂郡大和町）の地頭職を寄進するものである。 なお，後醍醐天皇綸旨（りんじ）をはじめとする残る104通は県指定重要文化財である。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（典籍）	紺紙金銀泥法華経巻第七 天暦三年ノ奥書アリ	こんしきんぎんでいほけきょう	1巻	尾道市東久保町	明43.4.20	紙本	縦34.2cm，横92.4cm	平安時代中期（10世紀）の装飾経。法華経の巻第七の巻初は金字の行と銀字の行を1行ごとに交互に記し，後段は金泥（きんでい）書きにしたものである。巻末に，天暦3年（949）6月22日に紀則常と女性の物部氏が壇主として奉仕した旨の奥書があり，平安時代中期における金銀交書（こうしょ）経として注目される経巻である。 軸端は，撥型（ばちがた）で，鍍金魚々子（ときんななこ）地宝相華文である。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
国	重要文化財（典籍）	紙本墨書大般若経巻第九十九 「薬師寺印」朱印竝ニ「薬師寺金堂」ノ黒印アリ	しほんぼくしょだいはんにゃきょう	1巻	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	紙本墨書	縦32.1cm，横35.8cm	「魚養経（ぎょようきょう）」と呼ばれる古くから朝野宿弥魚養（うおかや）発願経と伝えられるものの一巻で，奈良時代（8世紀）の代表的な写経のひとつである。魚養は奈良時代末から平安時代初期（8世紀終り～9世紀初め）にかけての人物で，医者であり能書家として知られる。 もとは奈良薬師寺に伝わったもので，天平宝字9年から宝亀元年（765～770）に写されたと言われる。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	重要文化財（典籍）	紙本墨書正親町天皇宸翰御消息 （青蓮院宛）	しほんぼくしょおおぎまちてんのうしんかんみしょうそく	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	綴葉装，平仮名	縦14.4cm，横124cm	戦国時代から安土桃山時代の天皇，正親町天皇（在位1557～1586）が京都の青蓮院（しょうれんいん）門跡（もんぜき）に宛てた書状である。新年のお祝いに対して返礼を述べたもので，ちらし書きで記されている。 正親町天皇は，天皇位を継いだ後3年を経て即位礼をあげたことで知られる。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	重要文化財（典籍）	紙本墨書陽光院御筆御消息 （五月十五日青蓮院宛）	しほんぼくしょようこういんおんひつみしょうそく	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	紙本墨書，折本	26.0×10.8cm（第1巻表紙）	陽光院は正親町天皇の第一皇子・誠仁（さねひと）親王の死後に追贈された尊号である。織田信長によって次代の天皇候補とされ，信長の死後も即位真近かと見られていたが，天正14年（1586）に病没した。 天正13年（1585），誠仁親王が青蓮院尊朝親王にあてた書状で，大和の多武峯（とうのみね，奈良県）が勅願所であることから，天下が静まったこの時に内大臣・豊臣秀吉の尽力を依頼するよう求めている。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	重要文化財（典籍）	紙本墨書別異弘願性戒鈔	しほんぼくしょべついぐがんしょうかいしょう	1帖	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	表紙は宝相華唐草文，見返し絵。軸は鍍金撥形。	縦25.8cm，全長85～148cm	鎌倉時代（1192～1332年）の天台座主（ざす）・慈円（1155～1225年）が筆者と伝えられる書籍。京都・青蓮院に伝来した鎌倉時代中期の浄土宗系統の注釈書の一種である。 綴葉（でっちょう）装で，別異弘願すなわち弥陀四十八願について往生礼讃及び観経疏の注釈を加えたもので，平仮名書きであることは，鎌倉時代の念仏思想の一端を示す好資料である。 ※慈円…藤原忠通の子。歌人であり，史書「愚管抄」の著者として知られる。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	重要文化財（典籍）	大般若経 （自弘安七年至同十年宋人謝復生一筆経）	だいはんにゃきょう	600巻	三原市本町	昭27.3.29	表紙は宝相華唐草文，各巻に見返し絵。軸は鍍金撥形。紺紙金字	縦25.6cm，全長75.5～135cm	鎌倉時代の弘安7年～10年（1284～1287）にかけて写された一筆大般若経である。奥書によると，宋の建康府の人謝復生が弘安7年5月から33か月余を費し，周防国楊井庄上品寺（やないのしょうじょうほんじ，山口県柳井市）において書写したことが知られる。 長享2年（1488）6巻が補写され，元和7年（1621）三原の八幡原元重によって正法寺へ寄進された。 今は折本であるが，もとは巻子本であった。 正法寺は真言宗仁和寺末（現，御室派）で，三原築城に際して沼田庄（沼田東町）から移された寺である。 一筆大般若経とは一人の人物によって写されたものをいう。		
国	重要文化財（典籍）	紺紙金字大方等大集経 附　黒漆塗経箱　1合	こんしきんじだいほうとうだいじゅきょう	50巻	廿日市市宮島町	昭30.2.2		縦25.5cm，全長58.7cm	平安時代後期（11世紀後半～12世紀）の写経で，大方等大集経（だいほうとうだいじゅきょう）30巻，大集日蔵経10巻，大集月蔵経10巻からなる。 表紙は宝相華（ほうそうげ）唐草文に，見返しには紺紙に金銀泥で経典の意味を示す経絵が描かれ，軸は鍍金撥金具（ときんばちかなぐ），紺紙銀界に金字で記されている。装幀は華厳経と同手法で，おそらく合わせて，五部大乗経として奉納されたものであろう。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（典籍）	紺紙金字華厳経 附　黒漆塗経箱　1合	こんしきんじけごんきょう	56巻	廿日市市宮島町	昭30.6.22 昭54.6.6 （追加指定）	綴葉装，料紙／斐（楮交漉）紙，押界，首尾欠，本文「丹タム」云々より存す	縦17.1cm，横16.5cm	平安時代後期（11世紀後半～12世紀）の装飾経。本来は60巻本であるが4巻が失われている。 紺紙に銀線で界線を描き，金字で記す。表紙は宝相華（ほうそうげ）唐草文で装飾され，軸端は鍍金撥金具（ときんばちかなぐ）が用いられている。見返しには金銀泥で経絵が描かれている。 大方等大集経とあわせ，五部大乗経として奉納されたと推測されている。		関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）
国	重要文化財（典籍）	貫之家歌合	つらゆきけうたあわせ	1巻	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭36.2.17	紙本墨書	縦28.3cm，全長9.22cm，	歌合（うたあわせ）とは，平安時代初期（9世紀前半）以来宮廷や貴族の間で流行した遊戯で，左右に分れた歌人がその詠んだ歌左右一首ずつを組み合わせ，優劣を争いその多少によって勝負を競う遊びである。 この一巻は，平安時代後期（11世紀後半～12世紀），藤原忠通の命で仁和年間から大治年間（885～1131）に行われた歌合を類別聚集した「類聚歌合」20巻本の巻十七の一部である。筆者の確証はないが，藤原俊忠筆と伝えられる「二条切（にじょうぎれ）」の一つである。 天慶2年（939）周防国衙で催された紀貫之（きのつらゆき）家の歌合の歌六番十二首を収めた断簡で，和歌資料として貴重なものである。 ※紀貫之（868?～945?）…平安時代初期の歌人		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（典籍）	賦物集（うたつゑ）	ふしものしゅう（うたつえ）	1帖	廿日市市宮島町	昭54.6.6	紙本墨書	縦／九寸一分（27.57cm）、全長／百八十尺五寸（5469.69cm）	鎌倉時代後期（13世紀後半）に成立した，連歌賦物集の現存最古の写本。首尾を失っているため，書名は不明であるが，後につけられた表紙には「宇多津恵（うたつゑ）」と記されている 賦物（ふしもの）とは連歌（れんが）俳諧（はいかい）用語で，百韻にある種の統一を求めるために句ごとに指定された語句を読み入れるものであり，賦物となる熟語を集めたのが賦物集である。賦物は鎌倉時代（1192～1332）には行われていたが，南北朝時代（1333～1392）以後は発句（ほっく）だけ入れるようになり，近世には全く行われなくなった。 この資料は，鎌倉時代の連歌の様子を伝える貴重な書物である。		
国	重要文化財（典籍）	伊都岐嶋社内宮調度等注進状草案（嘉禎三年三月） 紙背嘉禎二年具注暦	いつきしましゃないぐうちょうどとうちゅうしんじょうそうあん	1巻	廿日市市宮島町	昭54.6.6	紙本墨書	縦／九寸一分（27.57cm）、全長／百二十尺（3636.36cm）	新たに造営された厳島神社の新社殿に具備すべき荘厳調度・金銅金物以下のものの品名・規格・数量を列挙したものである。鎌倉時代の嘉禎3年（1237）に書かれたもので，差し迫って必要な調度等の予算書ともいうべき性格のものである。 嘉禎2年（1236）の具注暦（ぐちゅうれき，暦日の下にその日の吉凶や季節の変動などを詳しく注記した暦）の裏を利用している。		
国	重要文化財（考古資料）	安芸福田木ノ宗山出土青銅器 横帯文銅鐸　1点 銅戈　1点 細形銅剣　1点	あきふくだきのむねやましょうどせいどうき	3点	広島市南区宇品御幸	昭27.7.19		銅鐸／高さ19cm 銅戈／長さ29cm 細形銅剣／長さ39cm	明治24年（1891）に，光町尽三郎氏が木の宗山の鳥帽子岩（広島市東区福田町）の下から銅鐸，銅剣，銅戈（どうか）が弥生土器と一緒に発見したと言われている。このような出土状態はきわめて稀で，後に近畿を中心に分布する銅鐸と北部九州を中心に分布する銅剣，銅戈とが共存したことを証する貴重な資料である。このような銅鐸は「福田型銅鐸」とも言われ，九州，中国地方に分布し，数多い銅鐸の中でも形態及び特異な文様から見て古い段階の銅鐸とされている。		
国	重要文化財（考古資料）	日向国児湯郡持田古墳出土品 画文帯神獣鏡1面，変形四獣鏡1面	ひゅうがのくにこゆぐんもちだこふんしゅつどひん がもんたいしんじゅうきょう へんけいしじゅうきょう	2面	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭37.6.21	画文帯神獣鏡（中国鏡，平縁，四神四獣鏡） 変形四獣鏡（倭製）	画文帯神獣鏡／直径21cm 変形四獣鏡／直径20cm	持田古墳群第25号墳（宮崎県児湯郡高鍋町持田）出土の青銅鏡。 画文帯神獣鏡は，中国六朝（りくちょう）時代（3～7世紀はじめ）の鋳造と思われる平縁の四神四獣鏡で，紐（ちゅう）をとりまいて有節重弧文（ゆうせつじゅうこもん）があり，その内区に神像龍虎を大きくあらわし，それらの間に随従する数多くの神人禽獣（きんじゅう）が鋳出されている。内区には半円方形帯，外区内側に禽獣文帯を，外側には菱形文帯をめぐらしている。銘文がある。 変形四獣鏡は，倭製鏡とされ，内区の四獣頭部には又角（しゃかく）が認められ，外縁に「火竟」の二文字を鐫刻（るこく）している。 ※持田古墳群…5～6世紀の古墳群		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	重要文化財（考古資料）	広島県矢谷古墳出土品 玉類 碧玉管玉残欠共　5箇 ガラス小玉　3箇 鉄ヤリガンナ　1本 鉄刀子残欠　2口（以上主体部出土） 特殊壺　1箇 特殊器台　2箇分（以上周溝出土）	ひろしまけんやだにこふんしゅつどひん		三次市小田幸町	平6.6.28			これらが出土した矢谷古墳（史跡，三次市東酒屋町）は，三次盆地南縁の丘陵上にある弥生時代後期末から古墳時代初頭（3世紀）の四隅突出型前方後方形の墳墓である。 出土品は，最も規模の大きな木棺から出土したガラス小玉・碧玉管玉（へきぎょくだたま）と，他の埋葬施設から出土した（やりがんな）や刀子（とうす）片などのほか，墳丘上や周溝内から出土した鼓形器台（つづみがたきだい）・壺・甕（かめ）及び特殊器台・特殊壺の土器類である。 特殊器台は，埴輪の前身とされ，弥生土器の器台が大きく伸張し，葬送儀礼における供献用具として，特殊壺との組合せで独自の変化を遂げたものと考えられ，その分布は岡山県を中心に，広島県東部から山陰地方の一部に及ぶ。 矢谷古墳出土品は，古墳出現前における墳墓のあり方（葬送儀礼），吉備と出雲との関係を推測することができる好例である。		関連施設：広島県立歴史民俗資料館（0824-66-2881）
国	重要文化財（考古資料）	広島県草戸千軒町遺跡出土品 土器・土製品　1400点 木製品　632点 墨書木製品　193点 漆器　79点 石製品　310点 金属製品　238点 骨角製品　76点 繊維製品　2点	ひろしまけんくさどせんげんちょういせきしゅつどひん		福山市西町　県立歴史博物館	H16.6.8			福山市を流れる芦田川下流の河川敷に広がる中世の港湾都市跡からの出土品である。土師質土器等の日常雑器から中国・朝鮮産を含む各種の陶磁器，下駄や羽子板，付札等の木簡や呪符，漆器等の木製品，刀装具や手斧・銅鏡等の金属製品，笄・根付等の骨角製品で構成される。これらは，衣食住の全体に係わる当時の庶民生活を復元する上で貴重な内容を持っている。		関連施設：広島県立歴史博物館（084-931-2513）
国	重要文化財（考古資料）	広島県安芸国分寺跡土坑出土品 木簡　82点 墨書土器　42点 土器　78点 木器・木製品　50点	ひろしまけんあきこくぶんじあとどこうしゅつどひん	252点	東広島市西条町	令和5.6.27			安芸国分寺跡にて発見された木簡，土器等多量の遺物が埋められた大型土坑（どこう）からの出土品一括，全252点。 木簡，土器，瓦，服飾具や祭祀具などで構成され，国分寺（こくぶんじ）建立（こんりゅう）の詔（みことのり）（741年）から9年目である「天平勝宝（てんぴょうしょうほう）2年」（750年）の紀年がある木簡をはじめ，「安居（あんご）」，「齋会（さいえ）」などの仏教行事や，「佐伯郡（さえきぐん）」，「山方郡（やまがたぐん）」など安芸国内の郡名が記された墨書土器，角筆や物指などの木製品が注目される。 これらは，国分寺で勤修された諸法会（ほうえ）で用いた物品や荷礼などを一括で廃棄したものと考えられ，当時の仏教行事の一端を示す資料として，学術的価値が高い。		関連施設：東広島市出土文化財管理センター（082-420-7890） 写真提供：東広島市教育委員会
国	重要文化財（歴史資料）	阿弥陀経板木　2枚 嘉禎二年自七月十六日至八月十七日開版 法華経普門品板木　2枚 嘉禎二年自九月十八日至十一月廿二日開版 金剛寿命陀羅尼経板木　1枚 嘉禎三年五月廿一日開版	あみだきょうはんぎ・ほけきょうはんぎ・こんごうじゅみょうだらにきょうはんぎ	5枚	三原市八幡町宮内	昭60.6.6	板，桜材	縦25.0～27.0cm，横78.0～83.2cm	鎌倉時代の嘉禎2年（1236）製作の板木。阿弥陀経は「四紙経」と呼ばれるが，両面彫り二枚で全文を刻んでである。「嘉禎二年丙七月十六日始之，同歳八月十七日畢，願主安那定親」の刊記がある。巻首に「妙法蓮華経観世音菩薩普門品」とあり，刊記は「嘉禎二年申九月十八日始十一月廿二日畢，但為法界衆生並父母，願主口口氏」とある。巻首に「仏説一切如来金剛寿命陀羅尼経」とあり，刊記には「嘉禎三年丁酉五月廿一日，願主定親」とある。安那定親は嘉禄年間（1225～1227）にも春日版大般若経を刷り写したとされる人物。 この三種の板木は，最古の地方版として存在価値があり刊行年代が明確，板木そのものが伝存していることから印刷史上貴重な資料であるといえる。		関連施設：御調八幡宮宝物収蔵庫（0848-65-8652）
国	重要文化財（歴史資料）	身幹儀（星野木骨） 附　木箱	しんかんぎ（ほしのもっこつ）		東広島市鏡山	H16.6.8	木造，胡粉塗り仕上げ		江戸時代後期の広島の医師，星野良悦（ほしのりょうえつ）が藩許の解剖で得た人骨により，工人原田孝次に模刻させた木製の人体骨格模型である。寛政4年（1792）ごろの製作と推定されている。 寛政10年（1798）江戸で杉田玄白（すぎたげんぱく）・大槻玄沢（おおつきげんたく）ら蘭学者からその精巧さを絶賛され，さらに一軀を作成し寛政12年（1800）幕府の医学館に献上した。 人体の骨格構造を　精密に知る機会を与え，江戸時代の医学・蘭学の発達に寄与した点で，医学史上に重要である。 ※星野良悦　1754～1802，広島の町医者		関連施設：広島大学医学資料館（082-257-5099）

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（歴史資料）	岩倉具視関係資料	いわくらともみかんけいしりょう	1707点	廿日市市大野	H25.6.19			岩倉具視（1825～1883）宛ての書翰（しょかん）や意見書・報告書類，及び岩倉の書翰草稿からなり，約1,700通を数える。 本資料群は，岩倉宛ての三条実美（さんじょうさねとみ），大久保利通（おおくぼとしみち），木戸孝允（きどたかよし）や伊藤博文（いとうひろぶみ）書翰類が量的に充実し，幕末の政局，明治新政府の樹立，東京遷都，廃藩置県，岩倉遣欧使節，西南戦争など激動する当該期の政治の動向を伝える重要な一次資料群である。 既指定の岩倉具視関係資料と相俟って，岩倉具視の事績を知るうえのみならず，幕末維新期の政治史研究上に学術的価値が高い。		関連施設：海の見える杜美術館（0829-56-3221）
国	重要文化財（歴史資料）	菅茶山関係資料	かんちゃざんかんけいしりょう	6,255点	福山市西町二丁目４－１　広島県立歴史博物館	H26.8.21 R7.9.26追加指定	著述稿本類　679点 文書・記録類　949点 書画類　537点 書状類　1,110点 典籍類　2,746点 絵図・地図類　44点 器物類　190点		菅茶山（1748～1827）は，教育者として備後国神辺に黄葉夕陽村舎を開設して人材の育成に尽力するとともに，漢詩人として活躍した。その詩集『黄葉夕陽村舎詩』は同時代人に高く評価され多くの学者・文人と交わりを結んだ。 本資料は，茶山が詠んだ漢詩集の草稿などの各種草稿類をはじめ，日記類，典籍類，書状類，茶山に贈られた書画・器物（きぶつ）類などの一括資料である。 菅茶山の儒者，漢詩人としての思想・思索及びその形成過程を知ることのできる最も重要な資料であるとともに，茶山を中心とする近世の文人の交友を具体的に示す貴重な資料である。 令和7年、新たに寄贈された資料など886点が、茶山の古希や傘寿を祝う贈り物、茶山の落款印や廉塾の蔵書印など、前回の指定資料の価値を高める内容をもつものとして貴重であるとして追加指定された。		関連施設：広島県立歴史博物館（084-931-2513）
国	重要文化財（歴史資料）	広島頼家関係資料	ひろしまらいけかんけいしりょう	5,547点	広島市中区袋町5-15 頼山陽史跡資料館	R6.8.27	著述校本類　65点 文書・記録類　3,483点 書状類　1,587点 絵図類　41点 典籍類　124点 書画類　78点 器物類　169点		広島頼家は、江戸時代後期の著名な漢学者・頼（らい）山陽（さんよう）を生み出した家で、山陽の父春（しゅん）水（すい）以降広島藩の藩儒となる優れた儒学者を輩出した。 本資料は、頼家の人々が作成あるいは授受した著述（ちょじゅつ）稿本（こうほん）類、文書・記録類、書状類のほか、絵図類、典籍（てんせき）類、書画類、器物類から構成され、同家の広島藩藩儒としての事績を明らかにするとともに、同家における修学や儒教祭祀のありよう、同家と学者・文人・為政者との幅広い交流の具体を伝える。 本件は、頼家の人々に関する学問の内容と生涯の事績を研究する上での基礎資料で、儒学者の家の成り立ちと展開、同家の生活文化を窺わせるなど、わが国の江戸時代における思想史・文化史上に学術的価値が高い。		関連施設：頼山陽史跡資料館（広島県立歴史博物館分館、082-298-5051）